
トラブルメーカーな天使

九頭竜 氷雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トラブルメーカーな天使

【Nコード】

N1137M

【作者名】

九頭竜 氷雨

【あらすじ】

藤ヶ丘高校二年生である俺、芹沢直人は夏休み最後の日になって宿題という地獄からようやく解放されたのだが、友達からのメールから始まった今までとは違う日常を送る羽目になり、俺の人生は危険な道へと進んでゆくのだった・・・

第一章 #1【とある夏の最後に】

#1【とある夏の最後に】

・・・敵戦力、残り200。タイムリミットまであと30分。
くっ・・・このままでは・・・間に合わねえ！！

だが、しかあゝし！！

「うおおおつつつ！！負けられん！！」

スガガガガ
ドゴーン！

敵、100機を殲滅。残り100機。

「よし、残り100！だが気を抜くな、オレ！」

あとは・・・

数学の問題50問のみ！

とある占い師の持つ、最新の【予言の書】に記された記述の一つに
こうある。

- 魔王復活まであと二時間

そしてその出来事の原因が俺にあったとは・・・

夏の終わりを告げようとしていた今日この頃。

藤ヶ丘高校二年生である17歳の芹沢直人^{せりさわ なおと}・・・つまり俺のことだが、丁度その時の俺は二階の自室に籠もって夏休みの宿題を完遂しようとしていた。

外の茹だるような暑さと共に喧しい蝉の鳴き声を、科学が生んだクーラーによって素晴らしい空間へと変容した部屋と防音製に優れた耳栓により、意外と早く終わりそうだ。

・・・や、やっとオワタ・・・

はあ・・・手ごわい敵だったぜバカヤロウ。

と、愚痴をこぼしつつも達成感をひしひしと感じつつ、俺は大きく伸びをした。

・・・と、そんなことしている場合じゃなかった。

俺は急いで椅子から立ち上がり、耳栓を外し、クーラーを切り、腕時計を確認する。

あと3分しかない！！

俺は急いで胴着に着替えて部屋を飛び出し、階段を下り、玄関で靴を履き、二階建て一軒家である家を飛び出した・・・と見せかけて、一軒家のすぐ隣に建っている道場に猛ダッシュで向かう。

そして・・・

ダッダッダッ

ガラガラ

「たのもーっ!!」

「・・・遅い、あと廊下は静かにな」

「・・・すみませんでした」

少し遅れてしまったようだ。

白髪 of 古風な顔立ちをしている祖父は、既に胴着を着込み傍らに竹刀を置き、正座で静かに待っていた。

「ふう・・・直人はワシより強くなったが、礼儀作法はダメダメじやな」

「面目ありません」

自分ではその事を理解しているつもりだが、どうも畏まるのは俺のキャラじゃないから、なかなか難しいものだ。

「まあよい」

祖父はスツと立ち上がると、キリツとした表情になり、手に取った竹刀を握り構えをとった。

俺も部屋の隅に立てかけられている数本の竹刀から一つ選び、彼の前で構えた。

「それでは・・・始めるぞ」

泉流剣術道場。

泉関助（母方の祖父であることから、姓は違^{かんすけ}うが）は泉家代々の剣道の道場を開いている。

その事もあって、俺は幼い頃から剣道の技術を叩き込まれ……いや、俺の場合は3歳の頃から積極的に習い始めたらしい。

今も剣道は好きだが、物心がつき始めた頃に聞いたこの事には、流石に俺も驚いている。

我ながら3歳で竹刀に興味を持つとか、どんな子供だよ……

容姿、性格はいたって普通、成績も常に平均的である俺の、唯一といても過言ではないほどだがその剣道だけは得意な分野である。といっても……ごく一般的な剣道をやっているわけではない。

表向きは普通の剣道を教える関助だが、泉流剣術を継承するのは……

・身内のみ。

第一に胴着といっても羽織に袴のみ。防具を使用しない。

泉流剣術はいわば、

【殺しの剣】。

代々、様々な型を造り出し、脈々と受け継いできた泉流剣術はある時代まで最強と謳うたわれていたが、継承するのは血縁関係のある者のみ。まさに諸刃もろはの剣、一家が途絶えれば、その技術は闇に葬られてしまう。

関助爺ちゃんによると、二代前の継承者は泉流剣術を途絶えさせないために、歴史の表舞台から消え去った……

その事あってか、丁度その頃に起こった大規模な剣術道場の解体から身を免れたそうだ。

そして今に至る。

チャッ

竹刀を再度握り直し、俺は間合いをとるため数歩下がる。

防戦一方だな・・・

関助爺ちゃんは俺を自分より強いとは言ってはいるが、そんなものは立て前であり実際はその実力はあまり変わらない。

・・・やはり強い。

なら・・・！

左足を踏み込んで俺は素早く間合いを詰め、攻撃を仕掛けた。

「ヤーツ！！！！」

タンツ！！！！

ブンツ

キュツ

タンツタンツタンツ！！

かけ声と共に、素早く竹刀を振る。

間合いを詰めつつ、自ら編み出した最新の技（およそ20秒前に考えた）を使うタイミングをうかがう。

さつきとは逆に関助爺ちゃんが防戦一方となっているが、そろそろ反撃をしてくるだろう・・・

「ぬう・・・とわっ！！！！」

カンツ！！

「っと、（あぶねー！！！！）」

少し反撃までの時間が長かったので気を抜いていた俺は、危つくー

本とられるところだった。

こりゃあ、今日も長丁場になりそうだ・・・

だが結果的に、ものの五分で（いや、長いかな？）決着がついた。
というのも爺ちゃんは最近持久力が落ちてきていて、体力が持たないらしい・・・本人はあまり自覚はないようだが。

「イタタタ・・・いやあ、やっぱり強うなつとるのう」

爺ちゃんは俺の最後の一撃が当たった脇腹をさすりつつ、よっこらしょっと立ち上がった。

「そんなことないって・・・」

あはははと笑いながら照れ隠しに頭をかく俺。

「ふう・・・これでお前に安心して泉流剣術を任せられるのう」
「いやいや、まだまだ爺ちゃんには適わないって。最後の『風凧』^{かせなぎ}が決まっていたら、負けてたし・・・」

『風凧』とは数十ある泉流剣術の型の一つである。

「ガハハハ、そうかの。だがあれを避け、ワシに一撃を当てたのだから、お前は十分強い。自信を持ちなさい」

「ああ。ありがとな、爺ちゃん」

やっぱり少しは強くなった・・・ということなのかな。

ぐうつうつ・・・

結構集中していたせいか、お昼を過ぎていたことに気付かなかった。

「おお、もうこんな時間か。お昼にするか。直人、先に用意しておいてくれ、後片付けはワシがしておこう」

「了解です」

片付けを手伝おうと思っていたが、爺ちゃんに昼飯の準備をするように言われたので、俺は先に道場をあとにした。

§

§

「そういえば直人、宿題は終わったのか」

「もちろん、なんとか終わらせたよ・・・」

昼食後、俺と爺ちゃんは居間で一服していた。

「んあ？そう言えば、忘れてた」

俺はそう言つと、二階の自室に携帯電話を取りに行った。

高2になって、やっと買ってもらったのだが、俺が携帯電話を持つたとたんに、親友の木内きのうち 正宏まさひろからのメールが毎日のようにきている。

といつても、あまり迷惑しているわけではない。

正宏は同じ藤ヶ丘高校に通う同級生で、二年生から新聞部の副部長を任されているほどの情報通だ。（実際のところ、部長である三年の先輩よりか情報通なので、実権を握っているのは正宏である。）そして今ではいち早く俺にその情報をメールで教えることが日課に

なっているらしく、毎日面白い情報に笑わせてもらっている。

「おっ、メール着てる。なにになに・・・」

・・・ん？

そこにはこう書かれていた。

【緊急召集。例の組織の一味をKが確保した。現在、尋問を実行中。E地点に集合すること。そこで情報を提供する。】

・・・。

ナニコレ？極秘メール？

ムムム・・・気になる・・・

ピッポッバツ（電子音、古っ！）

「おう、正宏。さっきのメールだけど。・・・ん？なに？・・・いや、だから緊急召集ってメールで・・・そう、それ。え？ゲームの話？そなの？マジで？本当に？えー、っておい」

ブチッ

切りやがった・・・

いや、ね。だから、ね。怪しすぎるんだよね。気になるんだよね。どうなってるのかな・・・

イライライラ・・・

「あゝもうっ！！！気になる！マジ気になる！！っ！何か何？俺に何か隠していることは間違いない。ってことで・・・」

ダッダッダッ

「爺ちゃん！俺は迷宮入りとなった事件を解決してくるよ！じつちやんの名にかけて！」

「・・・よう分からんが、外に出るんなら気を付けるんじゃぞ」
「行つてきまーす」

俺は正宏の家と向かう・・・真実を知るために！！！！

§

§

「ヤバイ・・・やつてもた・・・orz」

直人の親友こと僕、木内正宏は境地に立たされていた。
まさか・・・直人にまで出していたなんて・・・
とりあえず、言い訳を考えなければ。

パターンその1

「実は・・・ドッキリでしたあ！」

「何の？」

パターンその2

「漫画の台詞でさあ」
「誰だって」

パターンその3

「ゲームで」

「それさつき使った」

パターンその4

「・・・少し、頭冷や」

「ダメダメダメダメ！ギリギリアウト！てか俺の台詞じゃないか、逆に！」

・・・面白さに欠ける。

いやいやいや、そんなことしている場合じゃなかった。
兎にも角にも、この状況をなんとか打破しなければ。

ガラガラ

「おい、正宏はいますか」

あはは、もう来ちゃった

つて、ノオオオオオツ！！？

そうこうしている内に直人の奴、来ちゃったよ・・・
しかも今、家には僕しかない。

「どうしたのかな、直人君。いきなり来て・・・」
「おおっ！！友よ！！・・・チェストーツ！」
「のわっ！！」

ズゴッ

うう・・・ひどい目にあった。

「イツツ・・・いきなりクロスチョップを喰らわせようとする友がどこにいるんだ」

「あははは・・・すみません、つい出来心で」

茶髪がかった黒髪を眉まで伸ばした、ツンツン頭の友人である直人と僕は今、家の居間にいる。幸い、直人の鉄拳は避けたのだが、側にあった机に脇腹を強打してしまったのだ。

「ったく・・・それで、納得したか」

「ああ、つまり新聞部の活動で、部員に送った筈のメールが俺にも届いたってこと？」

「そーいうこと。このことは内密にな、オーケー？」

「んゝ分かった。まあ部のネタなら仕方ないか・・・」

「まだちゃんとした確証がないからなあ。スマンな」

「いいってことよ、友よ。お前の情熱は痛いほど知ってるからな」

どうやら理解してくれたらしい。

ホッとしたぜ、まったく。

「僕の脇腹の痛さも分かって欲しいんやけどな」

「それは自業自得だし」

「ひっでー」

「プツ・・・ハハハハッ！」

「ハハハハッ！」

僕達はそのやりとりに思わず笑ってしまっていた。

「・・・そういえば、直人の叔母さんから電話があったで。少し前に家に電話したけど誰も出なかったからって」

「あ、そっぴゃあ爺ちゃんと稽古していたから、家には居ない時があったなあ。でも、ついさっきまでは家で飯食っていたのに、どうして再度俺の家にかけてこなかったんだ？」

「いや、なんでも伝言があるだけらしくて、僕から直人に伝えてくれたらええって言ってたから」

「それで？」

「ああ、なんでも叔母さんの同僚が直人が剣道やってるって聞いたらしくて、それならとその同僚が趣味で何か作ったらしくて、それを直人に宅配で送ろうとしてたらしいねんけど・・・」

ピンポン

「宅配便でーす」

タイミング良すぎ！！

「・・・なんでお前の家なんだ？」

「だから、叔母さんが言うには、僕からの説明受けてから直人に渡したいらしく、途中で配達先を僕の家に変えたらしい。それで直人

に電話かけようとしたら・・・」

「逆に俺からタイミングよく電話がかかってきたから、驚いてしま
って挙動不審だったと」

「そういうこと」

僕が挙動不審だった理由はなんとなくあったらしい。

とりあえず、僕の家が届いた荷物なので、僕が受け取ってサインし
てから直人に渡した。

それは細長い長方形の箱だった。

t o b e c o n t i n u e d . . .

第一章 #1【とある夏の最後に】（後書き）

こんにちは！

文才のなさそうな駄作を読んでいただいております。
氷雨ひやめです。

初投稿なのですが、とりあえず今後とも頑張っていきます！（と
りあえず”って・・・）

第一章 #2【異なる世界】（前書き）

新キャラ登場！！って、まだ二話なんですけど・・・

第一章 #2【異なる世界】

#2【異なる世界】

母から送られてきた荷物を開けると、中身は竹刀だった。

「竹刀？よつと・・・重っ!!」

箱から取り出して握ってみると、それほどではないが普通の竹刀より重く感じた。

“ ウェイトが入っているのか？なにか仕掛けがありそうだな・・・ ”

「どれどれ、オジサンにも見せてくれ」

「あいよ」

正宏が触りたそうにしていたので、俺はその竹刀を渡した。

「なんじゃこら!？重すぎ!」

正宏は手に持った不思議な竹刀に驚いていた。

「だよな・・・」

「絶対普通の竹刀じゃないで・・・何か中に入っているんじゃないか」

確かに・・・今まで母から送られてきた物は、全部何かしらの仕掛けが施されていた。

・・・もちろん、使えない方向で。

「この前の『死人も起きる目覚まし時計』だっけ・・・あれは酷かった」

「ああ・・・」

ネーミングセンスも最悪だが、確かにそのまま死人も起きる勢いだった。というか爆破によって死にかけた。後片付けが大変だったぜ・・・これ以上は思い出したくないよ。回想終了。

「まあ、これは叔母さんの作品じゃないんやろ？だったら大丈夫とちゃうか？」

「確かに危険はないと思う。今見つけたんだが、箱の中に竹刀を入れる袋と説明書が入ってたぜ」

俺は母と違って説明書まで用意して入れているその同僚の心意気に、母も見習って欲しいと思うばかりであった。

「・・・」

パラパラっと割と分かりやすいその説明書を見た正宏と俺は、やはり母と同類か・・・と後悔した。

§

§

結局、直人はその竹刀を持って、また明日という言葉とともに帰っていった。

直人が早く帰ってくれて良かった・・・

僕は直人が見えなくなるまで待ってから、急いで例の場所へと向かいつつ、携帯電話を取り出した。

「…はい。俊美としみですう。只今電話に出ることが出来ないうすう。ピーっという発信音の後でお名前を…」

「居留守を使うな」

「むううう。マー君がなかなか連絡くれないからですよ、寂しかったですう」

なんか付き合い始めた恋人みたいなこと言っとる・・・

「スマン！ちよつと立て込んでいて・・・」

「分かってますよ。直人君が来たんでしょ？何でかな」

ギクツ！・・・俊美め、‘能力’使ったな。

「ゴメンナサイ。後でちゃんと説明します」

「分かればよしっ！」

なんとか納得してくれた。ってそんなことよりも、

「それで状況は？」

「ん、それがね、庄太郎しょうたろう君が‘使徒’の一人を捕まえたハズだったんだけど・・・」

「だけど？」

「逃げられちった　テヘッ」

ズザザザザーッ！！！！

吉本もビックリなほどに盛大にずっこけた。

「・・・だ・大丈夫？」

痛い・・・というか！！！！

「何しとんじゃあ、お前等はーっ！！！！！」

「ひっ！しゅみませんでした親方あっ！！！！！」

あまりの出来事に頭が痛い・・・かんでるし・・・

「だつてえ・・・‘使徒’^{しと}の仲間がいきなり襲って来たんだよ！怖かったよあゝ」

‘使徒’の・・・！？
初耳だしっ！！

「ちょ、おまつ、‘使徒’の仲間だと！！被害状況は！！！」
「庄太郎君が負傷したけど、美琴^{みこと}さんが手当てしてくれたから今は大丈夫・・・」

僕はホッと溜め息をつく。

もつと酷い状況になっていたかもしれないからだ。

「そうか・・・ご苦労だったな、俊美。怒鳴って悪かった」

「うん、気にしないから大丈夫」

気にしていないというのは逆に問題だが・・・

「それで、今そこに居るのは三人だけか？」

「うん、他の仲間には搜索に出てもらっているよ」

さすが俊美。頭がええだけのことはある。言動はアホだが。

「・・・なんか言った？」

「いや、賢明な判断やなって言うただけや。とりあえず僕もそこに行くわ。庄太郎しょうたろうに直接聴きたいからな」

「む・・・了解だよマー君」

「じゃ、後で」

「あ、ちよっ」

ピッ

・・・少し不機嫌そうだったが気にしない。

「さて・・・」

僕は転けた時にズボンに付いた汚れを取り、再び走り出す。
いやな予感がする・・・急がなければ！！

「絶対に逃がさねえぞ、黒月くろつきの使徒しと！！！！」

§

§

「・・・」

「……………」

き……気まずい。視線が顔に突き刺さる……

キョロキョロと周りを見渡すが、俺以外にこの裏道には誰もいない。明らかに少女は俺をじつと見つめていた。

どうしよう、どうするよ、俺……！

俺は正宏と家で別れ、袋に入れた竹刀を持って家路へと向かった。
いた。

……？

何気なく背後に気配を感じ、後ろを振り向くと……

白銀の長髪ロングヘアの少女がいた。

俺は目を疑った。なぜならば……彼女は裸足で立っていたからだ。

服装もおかしい。白い肌には合っているかもしれないが、飾り気の無さ過ぎる真っ白なワンピースを来ているだけのように見えた。

小学生だろうか？身長は140cm前後で瞳は青く澄んだ色をしていて、それは何もかも見通すような瞳だった。それでも小学生並みに胸は“ぺったんこ”だった。

瞳や髪の色から日本人でないだろう、それくらい俺にも分かる。

だがそれだけではない、その瞳を俺に向けて動かそうとしない。
俺は石化したように固まってしまった。

不覚にもその瞳と彼女の容姿に見とれてしまったのである。

・・・・・・・・・・はっ！！

いやいやいやいや、待て待て待て待て。

なに考えているんだ俺はロリコンではないぞ、決して、断じてっ！！

ロリコンな発想を払拭するために俺はブルブルと頭を振る。

すると、それまで無表情だった彼女がそんな俺を見て、クスクスと可愛らしく笑っていた。

俺は急に恥ずかしくなり、なんとか平常心を保とうと、彼女に聞いた。

「え、えつと・・・・・・・・俺になにか用かな？」

その問い掛けに答える前に、彼女はキョトンと不思議そうな顔をしていた。

『あら、やっぱり私のことが見えているのね』

透き通るような高くて可愛らしい声が俺の頭に響いた。

‘耳’からでは無く直接頭に響いたことにも驚いたが、俺はその答えに疑問を持った。

「見えている、って・・・・・・・・どういうこと？」

この娘^こは自分のことを幽霊だとしても言っているのだろうか。それに、‘やっぱり’とは？

『知りたいなら、私を捕まえてみて！』

彼女はそういうと、フワッと白のワンピースの裾をはためかせ、俺に背を向けて駆け出した。

「えっ！？ちよつと待って！」

彼女のいきなりの行動に驚いていた俺だが、何故か自然と体が動いて彼女を追いかけ始めた。

すぐに追いつくと思っていたが、予想は外れていた。

走っても、走っても、彼女に追いつくことは無く、俺との距離を一定に保って前を走る謎の少女。

まるで俺の位置を把握しているかのように、走る速さは全くと言ってもいいほど一緒だ。

だがその時の俺はそのことに疑問を持たず、ただ目の前の少女に走りで負けたくないという思いだけで彼女を追っていた。

彼女にある場所に誘導されているとは知らずに。

§

§

ああ、なんて失態だ・・・

彼女の護衛として来たはずなのに、この有り様。

まさかこの世界に‘彼等’までもが来ているはずがないと思っていた。

ある一人の人物を見つけること

これが彼女と私が、^{アナザーワールド}この世界’を訪れた理由・・・そして目的だった。

私の名はリーザ・アルバーノ。歳は15ではあるが、ローウェント家直属の騎士団に所属している。

そして今私が護衛している方が、フィレス・ローウェント様だ。

彼女は私と同じ年なのだが、今回のようなローウェント家当主（つまりフィレス様のお父様）からの重要な任務を任されるほど優秀な‘魔術師’である。

一階の剣士である私には今回の任務の詳細は、フィレス様の護衛といえども伝えられていない。

あくまで私は彼女の護衛のみをすればよいのだが、フィレス様は幼少時代からの付き合いあって、私を慕ってくれていることから、任務の内容の表面を教えてくださいました。

ただその人捜しの任務は、どうやら私達の世界・・・‘魔法世界’の命運を左右するほどのものらしい。

‘魔法世界’・・・

私達が今いるこの世界を化学で発展した世界：‘化学世界’と位置付け、その‘化学世界’からでいうと私達の世界は魔術（術式魔法）

で発展した世界であることから‘魔法世界’と呼んでいる。
というのも‘魔法世界’からこの‘化学世界’へ通じる‘ゲート’
…端的に言うとき空断層が現れたのは半年前のことであり、他の世界があることを認知したのもその時で、こちらの世界では魔術という概念がないことから区別するために作られた名である。

‘ゲート’が突然現れた詳しい原因は不明…

だが、この世界を訪れた調査団により、魔術を行使するために使用する‘マナ’と呼ばれる自然エネルギーの空気中の密度が、私達の世界よりも濃いことが判明した。

何故マナ濃度が高いのかというと、この世界の人々は魔術の存在を知らず、全くといっていいほどマナが使われていないという事が、一番の理由と定義されている。

ということもあって、私達は魔術を使えない。なぜなら空気中のマナ濃度が高くて、魔術を行使する時に使用するマナ量のコントロールが難しいからだ。

幸いなことに己の体内に蓄積しているマナを使用する‘身体能力向上型の魔術’は使えてはいるが…

「どうして彼奴等は魔術が使えるのよっっ!!!!」

…今、私達は謎の二人組に追われている。

§

§

この世界に来て3日たった今日・・・
さすがにそろそろその人物を見つけなければならないなあ・・・

私、フィレス・ローウェントは焦りを隠せずにいた。
なんといっても私達の世界の未来がかかっている（らしい）のだから。

早朝、三日前から住处にしているアパートの一部屋から飛び出した私は、その人捜しに限界を感じていた。

「あゝ、もうっ！何か手掛かりはないの！」

その人物がアパート周辺の何処かに住んでいることは確かなのだが、それでもその人物が持っているはずの強い魔力（体内に蓄積されたマナ量のこと）が感じられず、その人物を見つけ出すことは雲を掴むような話だった。

「お待ちください、フィレス様」

そう言つて私を追いかけたのはリーザである。

彼女は私の昔からの無二の親友なのだが、騎士団に入ってからというものの、昔は気さくに私のことをフィーと呼んでくれていたのに今ではフィレス様と、なんだか他人行儀な呼び方をされて、最近はどうしても冷たく当たってしまう。

もちろん彼女は何も悪くはないのだが・・・

「ついてこないでリーザ。私のことはほっというて!!」

私は彼女に怒鳴り散らしてしまった。

こんなはずではなかったのに・・・

父上が彼女を私の護衛役として任命したのも、私達が親しい中であることを知ったことで、この任務がかなりの責任を伴う任務であることからの、私への彼なりの気遣いだった。

でも・・・私はその重圧に心が押しつぶされそうだった。

私達の世界の命運が掛かっている・・・それなのにまだ見つからない。

「・・・」

彼女はしおらしく私の後ろをついてきている。私は彼女を無視しつつ、自分の行動に後悔していた。

私はなんて小さい人間だろうか。

いくらこの歳でこんな任務を任されるほどの魔術師としての才能や能力を持っていたても、相手を思いやる気持ちがないのは人としてどうかと思う。

・・・この世界にきて魔術が使えないことに不安を感じていた。そのこともあり、なかなか進展しないこの状況に魔が差して、リーザに八つ当たりしてしまっていた。

だからこんな事態を招いてしまったのかもしれない

t o b e c o n t i n u e d . . .

第一章 #2【異なる世界】（後書き）

次回、突然の“死亡フラグ（仮）！！”

第一章 #3【黒月の使徒】

#3【黒月の使徒】

白銀の髪の少女を追いかけていた俺こと芹沢直人は路地を右に曲がった彼女を追って同じく右に曲がろうとした・・・が。角を曲がった瞬間、彼女の姿は消えていた。

「あれ・・・？」

さっきまでの走るスピードから考えて、先に行ってしまった可能性は低い。第一、曲がった先の道は真っ直ぐで見通しがいいところで左右に入る道はだいたい先までない。つまり・・・

突然消えたのだ。

悪寒が走った。もしかして、本物の幽霊だったか！？
だが、あの時に彼女を見たときの俺は、なんというか・・・何故か懐かしさを感じ、安心感を持っていた。

彼女は・・・何者？

冷静なって考えてみるとおかしな話である。彼女の身なりもそうだが、何より裸足で硬いコンクリートの上を俺と同じスピードで走っていたのだ。

それに・・・

ドカーーン!!!!!!!!

「!？」

あまりのデカい爆音に、一瞬俺の思考は停止してしまっていた。

「つて、今は!?!?？」

爆発事故だろうか、どうやら近くでの爆発らしい。

・・・何か嫌な予感がする。

そういう思いとは裏腹に、俺の体は爆発音がした場所へと早足で向かった。

§

§

数分前、何気なく立ち寄った商店街で、怪しげな人影を二人見た。見た目はごく普通の格好をしているのだが、魔力の波長を感じたのだ。

この世界ではマナ濃度が高いことから、ここに訪れる魔法世界の住

民は、自ら体内のマナと大気のマナの関係を絶って体内魔力を安定させなければならぬし、それにより空気中のマナを使用する自然現象の魔法（炎や水を使った魔法）や大きな威力を発揮する魔法は使えない。

魔力の波長を感じるといことは、体外との魔力経路を絶っていないということ・・・

それはあまりにも危険な行為で、体内にマナを蓄積する魔力炉が体外魔力を吸収に耐えきれず、下手すれば死ぬことだっている。

どうやらリーザもその事に気付いたらしく、そわそわしていた。

「リーザ、どう思う？」

「おかしいですね・・・ゲート時に身分証と『遮石』^{リミット・ストーン}を渡されているはずですよ」

「遮石」とは強制的に体外と体内のマナの間に壁を作り、これをも身につけていれば魔力炉の暴走を防ぐことが出来る魔具^{マジックアイテム}である。

私やリーザは自ら空気中のマナとの接触を絶つ魔法を使えるが（実際、この魔法は気配を絶つことが出来る魔法の一つで、重宝されている）、高等魔法であるからにして使えない者が多い。つまりこの『遮石』さえ持っていれば万事OKだということだ。

その『遮石』を持っていない、もしくは使用していないということは・・・

「侵入者ね・・・」

魔法世界の政府によってこの情報は隠されているが、実はその空間断層が発生した場所は『ゲート』が発生したユグドラシルという都市だけではない。

魔法世界にもこの世界（化学世界）にそっくりな遺跡がいくつもある。その幾つかは魔法との関係が深い遺跡でユグドラシルの『ゲート』

ト」の影響もあつて、同じ空間断層が出現した所もある。
現在判明している「ゲート」は、主に政府が管理しているが、偶発的に「ゲート」が様々な遺跡で発生するので全てを管理下に置くことはまだ出来ていない。

恐らく彼等は未発見の「ゲート」を通過し、こちらの世界に来たと推測するのが妥当だ。

つまり、政府には知られたくない何らかの目的を持って来たのだろう……

私は一つの可能性に気付いて身震いした。

「もしかしたら……私達と同じ理由かもね。悪い方の」

§

§

結果としてはフィレス様の予想は当たらずとも遠からずであつた。

「そのペンダントの魔石！！まさか標的から俺達に近づいて来てくれるとはな……ようやく見つけたぜえ！！！」

狙われていたのはフィレス様だつた

私達はとりあえず彼等をつけることにしたのだが……

隠密行動は彼等の方が一枚上手だったらしい。すぐに気づかれてしまった。

しかも彼等の狙いはフィレス様が首にかけているペンダントだった。

そのペンダントは、私達の任務で大きな鍵を握っていた。

フィレス様から聞いたのだが、そのペンダントは今探している人物のもので、そのペンダントの魔石によって、‘化学世界’の人間であるその人物が魔術師として覚醒してもらい、そうすることによってその人物に、‘魔法世界’に来てもらうというのが、この任務の最終目的である。

なるほど、その人物がそのペンダントで覚醒するのを防げば、ただの人間である。

つまり、彼等は私達と敵対する組織の一味というわけだ。

何故彼等が敵対する組織の一味であると確証が持てるのかというと、当主様からの話の中で裏で私達の行動を阻止しようとしてる組織の存在の話を聞いたからだ。

組織の名は、‘黒月の使徒’。

これは彼等が名乗っている名で、近々魔法世界で何か一騒動起こそうとしている動きがみられているらしく、今回の任務はその事に関係しているらしい。

……って長々と話をしている場合じゃないっ！

私はフィレス様の手を取り、その場からの逃走を実行した。

「待ちやがれっ！」

二人組の内の、背中に長剣を刺した背の高い比較的体つきがよい男

がそう叫ぶと、もう一人の腰に短剣を下げている貧相な男と共に追ってきた。

すぐに身体能力向上型の魔術で脚力強化をし、逃げ出そうとした私達であったが、考えていることは向こうも同じ、どうやら振り切れそうもない。

・・・さらに驚くべき行動を相手はとってきた。

「水よ！すべてを凍て付くす刃となれ！」

「魔術の詠唱！？」

「そんな！！？この世界で！！？」

私達は逃げながらも絶句していた。

この世界の住民に魔術を見られることはあつてはならないことだが、マナ密度の濃いこの世界では魔術は使えないはず・・・

「氷槍！！！！」
アイスアロー

防御魔術も使えない・・・万事休すか！？

いや・・・フィレス様だけは守ってみせるっ！！！！

私は腰に刺していた短剣を鞘から抜くと、フィレス様の前に素早く移動。

そして彼女の姿を隠すように前に立つと、出来るだけ多くの氷の矢

を右手に逆手に握った小刀で防ぐ・・・

ズガガガガガッ！！！！

「がはっ！！」

体のあちこちに痛みがはしる。

痛みの元は短剣で捌ききれなかった氷の矢であった。

痛みのあまり、意識がとんでゆく・・・

ここまでか・・・

私は短剣を取り落として地面にひざを突き、その場に倒れ込み意識を失った。

§

§

「なるほど・・・」

僕は葛城庄太郎と篠崎俊美、陣内美琴と合流、その時の詳しい説明を聞いていた。

要点だけを述べるとすると、どうやらもう一人、氷使いの魔術師が捕らえていた男の仲間がいたらしく、突然の氷結魔術による攻撃に対応出来ず、あまつさえ美琴の能力、‘呪縛’を彼女に攻撃を仕掛けることによって解いてしまったといったところだ。

幸い、美琴は‘護符’による防御で攻撃を避けられ、庄太郎も負傷したが掠り傷程度で問題なさそうだ。

庄太郎の負傷を大袈裟に受けとめていた俊美は、彼に氷結魔術から助けてもらって彼が負傷したことに気が動転していたことによるものらしい……

「（まあ、被害がこんだけですんだことに感謝しなきゃならんな。）
まあ、今回は良しとしようか」

「「「???」」」

三人は驚いた顔を僕に向けた。

「え……私達、せつかくの手がかりを逃して……」

そう焦って話す俊美に僕はデコピンをくらわせた。

「いたっ」

「アホか。被害がこんだけですんだんや。奴らの仲間がようさん来
よったら、お前等下手したら死んでたかもしれへんねんで」

「「「ギクッ」」」

そう、今回は運が良かったただけだ。

なにせ、少ない只でさえ少ない人員を‘使徒’の搜索に割いてしま
い、少人数での行動をとらせてしまった。

こりゃあ、修正の余地ありだな。

僕は目の前にいる三人を見た、

「（本当に、今回ばかりはこいつらに迷惑かけてしもたな）」

……あれ？

これで問題は全て解決したはずなのに、まだ嫌な予感がする・・・
僕はふと視界に入った美琴を見つめた。

そういえば、今になって気付いたんだが・・・いつもと違って美琴の口数が少ないような・・・

「って!!?? 忘れとつたがな!!!!」

ズスズカとその勢いに驚いて動かない俊美に詰め寄ると・・・

ムニユ

「ひゃんっ!!」

そのそこそこ放漫な胸の片方を右手でわしずかんだ。

「ほえっ!!」

「ぶっ!!」

その行動に俊美は驚いて奇声を上げ、庄太郎は鼻血を盛大に噴いた。

「な、何してんだお前は!? そんなうらや・・・ゴホン、破廉恥なこと、公衆の面前でするんじゃない!! いや、今は俺たち二人しかないが・・・いや、それでもだっ! 俊美のアホに毒されたのか!？」
庄太郎が鼻を押さえながらそう怒っていった。こいつ、動揺すると口数が増えるんだよな。

というか何か本心が口に出てたぞ、おい。

「わ．．．私はこんなことしないですう！」

俊美、腕をブンブン降って抗議している姿は余計アホっぽいぞ。

「というか．．．気付けよお前等」

「？」

「美琴が固まっているのは分かるが．．．」

まだ気付いていない。

「はあ．．．お前等。普段の美琴ならこの状況下でどういう行動をとる？」

．．．．．

「「あーっ！！？殺人拳がないっ！！？」」

陣内美琴。彼女には使ってはならない最大の兵器を持っている。それは．．．殺人拳だ。

体内のマナやその他諸々のエネルギーを拳に凝縮し、凄まじい勢いで放つという、最終兵器だ。

しかも困ったことに奴はそれを1日に何発も打てるのだ。もう大量破壊兵器といっても過言ではない。

一に殴る、二に殴る。

三、四も殴って、五に殴るだ。

僕も何度か昇天しかけた．．．今生きてるのが不思議なぐらいだ。最も．．．予想が外れていれば、僕はすでにこの世に存在していないだろうが．．．

「ってことは……」

「もしや……」

そう、その殺人拳が俺の顔面に未だにめり込んでいないということ
は……

ボンッ！

小さな音と共に固まっていた美琴の姿が消え、その場に出現したのはひらひらと舞い落ちる長方形の紙だった。

「「式神!!?」」

「よく考えれば、あいつはこんな簡単に引き下がる奴じゃないっ！
!?!」

嫌な予感は的中していた……どうやらどこかのタイミングで式神とすり替わり、使徒の二人組を追いかけてしまったようだ。

あのバカっ！一人で行動するなっつたのに!!!

「庄太郎、俊美！お前等はここにいてくれ！！僕があのアホ女連れ戻してくるさかい、待っとけ!!」

「了解っす、マー君！気を付けて！」

「気を付けるよ、正宏」

「ああ」

二人からの声援を受けた僕は、式神に残っている彼女自身の魔力に酷似した魔力のの波長を頼りに、彼女の気配を感じ取った方角へと走り出した。

最も恐れることが起こってしまった。

§

§

「リーザ！」

私のせいだ・・・

私は座り込み、氷の矢が刺さっている彼女を助け起こした。
どうやら見たところ急所を外しているらしい。

私のせいで・・・

普段の私だったら私自身が狙われる可能性を考え、こんな浅はかな行動をとらなかったはずだ。

私は苛立っていた、未だに目的の人物を見つけられていないこと。だからリーザに八つ当たりし、判断を怠った。

全部私のせいだ・・・

私は悔しくて、涙を流していた・・・

腕に抱えているリーザの眠ったような顔に私の涙がつっていた。

「さあ、そのペンダントを渡してもらおうか」

「拒否権はありませんよ」

二人組の男の足音が近づいて来る。

私はリーザを守るように覆い被さった。

もちろん魔石を渡すつもりもない。

魔術が使えない自分の無力さを感じつつ、私はリーザにこれ以上傷付いて欲しくないという気持ちに刈られ、私は動こうとしなかった、いや出来なかった。

「こいつ、殺っちまってるいいか。魔石さえ手に入ればいいだけだし」

「はあ、仕方ないですね」

今は背を向けて見えない男達の目が光ったような気がした。

「もちろん、いいですよ」

t o b e c o n t i n u e d . . .

第一章 #3【黒月の使徒】（後書き）

くあとがき劇場（第一回）

直人「うわーっ!!」

正宏「な、なんだよいきなり」

直人「来ちゃったよ・・・」

正宏「なにが？」

直人「『死人も起きる目覚まし時計2号』・・・」

正宏「・・・生きて帰ってこい。骨は拾ってやるから」

直人「俺まだ死にたくねーよっっ!!」

正宏「まあ、主人公のお前が死んだらこの話終わってしまうからな。

よし、代役として僕が活躍したるで!!早速準備しないと」

直人「俺死ぬの前提!？」

その後、直人の姿を見た者は誰もいなかった・・・

直人「勝手に殺すなーっ!!!!」

- f i n -

第一章 #4【一太刀の心】（前書き）

戦闘・・・開始!!

第一章 #4【一太刀の心】

#4【一太刀の心】

私はもう、この男達によって殺されるのだろう・・・

彼等にとって必要なのは私が今首にかけているペンダントの魔石であり、私やリーザの命はどうでもいいらしい。

「そんじゃあ・・・サヨウナラっ!!」

長剣の空を切る音が聞こえる。

切られるっ!!!!

私は迫り来る恐怖に目を閉じた。

ガキンッ!!

・・・?

いつまで経っても切られた時の痛みが来ない?

私はゆっくりと目を開けると・・・

すぐ横に先ほどまで無かった「人影」を見た。

「まったく・・・オッサン、女の子二人を男二人で襲うなんて、男の風上にも置けないぜ」

それは、「使徒」の二人組とは違う、知らない男の子の声だった。
「えっ!?!」

後ろを振り返ると、襲ってきた男の長剣を見たこともない歪な形をした木の棒みたいなモノで受け止める男の子の後ろ姿が見えた。そして、その男の子はこう言った。

「助っ人とーじょっ!!」

§

§

爆発音のする方向へ走っていた俺は、肩からずり落ちかけていた竹刀の入った袋に気を取られていたせい、突然曲がり角から現れた女の子に気付かず、諸にぶつかってしまった。

「ふえっ!!」

「うわっ!!」

ドスンッ!!

「イタタタタ・・・」

ぶつかった反動で尻餅をついた俺は、痛む尻をさすりながらぶつかってしまった相手の様子を見ようと立ち上がった。

「って、陣内!？」

どうやらぶつかってしまった相手は、俺の学校のクラスメート、陣内美琴であった。

・・・どうやら目を回して気絶しているようだ。

「おい、陣内いー。大丈夫か？」

・・・返事がない、ただの屍のようだ。

「って勝手に殺すなーっ！！！」

ガバツと起き上がった彼女は、怒りながらそう叫んだ。

お前は俺の心のボケを読み取れるのか・・・？

って、そんな事よりも。

「「なんで（どうして）お前が（キミが）ここにいるんだ（いるの）！！？」」

聞こうとしたことは同じだった。

とりあえず、俺から答えることにした。

「さっきの爆発音聞いただろう？それで気になって見に行こうとしただけだ」

彼女は少し考え込むような仕草を見せ、こう言った。

「なら、止めておきなさい。こういうことは警察に・・・」

「！！？」

近くに殺気！！

「ど、どうしたの？」

どうやらこの異変に彼女は気付いていないようだ。

「（どうしよう・・・こんなこと彼女に話したら、変に思われるだろうし・・・）」

その時だった。

「ひゃんっ！？」

「えっ??？」

突然彼女は奇声を上げ、その場に倒れたのだ。

「ちよっ、えっ？何？」

状況が掴めない俺は、とりあえず彼女がピクピクと痙攣していることから、気絶しているだけだという結論に至った。

周囲に人影はみられない。

俺は彼女を何となく正広に任せた方がいいと感じ、携帯電話で高速でメールを打ち、要点だけを伝えた。

「・・・ごめん」

俺は返事を待たずに気絶している彼女を残し（罪悪感はあるが）、こけた時に落とした竹刀の袋を肩にかけ直すと、殺気を感じた場所へと向かった。

§

§

「っあーっ！！あのアホ女！どこ行ってん！！」

僕は焦りのあまり頭をかきむしった。

式神に残る美琴の魔力の波動を探りながら彼女を捜すも、だいたいの位置しか分からない。

くそっ、どうすれば・・・

ピリリリリ（電子音）

「美琴か！？」

僕はすぐに携帯電話を取り出し開いたが、予想外なことに直人からだった。

しかも・・・

「な・・・陣内が藤ヶ丘二丁目　で倒れている。あとヨロ”

って、わけ分からんわ！」

悪態をつくわりには分からないことはない文章だが・・・

恐らく、さっきの式神にした事が原因で気絶しているのだろうと、彼女が倒れている理由は容易に想像出来るが・・・

なんで直人がそんな所を通ったんだ？

§

§

「（つて、なんかやばいじゃん！！！）」

目の前で、今まさにうずくまっている女の子に、長剣を振り下ろそうとする黒尽くめの男と、それを後ろで見ている男の姿があった。

俺は覚悟を決め、素早く袋から竹刀を出すと、懇親のひと蹴りで素早く目標の場所へと向かった。

「（間に合えっ！！！）」

ザッ

ガキンッ

・・・あぶねえ。

俺はギリギリで男と女の子の間に割って入った。

「ったく・・・オッサン、女の子二人を男二人で襲うなんて、男の風上にも置けないぜ」

「えっ！？」

その女の子の驚いたような声が聞こえた。

別にカッコつけるつもりはなかったが、漫画の台詞のような言葉が出てしまっていた。

「助っ人とーじょっ!!」

‘助っ人’というのは少々語弊ごへいがあつたような気がした。だいたい、後ろにいる彼女とは面識もないはずだし名前も知らないし。ま、いつか。

「小僧、何者だ。その嬢ちゃんの仲間か」

そう言ったのは長剣の男だった。

彼は俺が話している間に長剣を竹刀から離し、間合いを取っていた。

「人助けだよ、人助け。つーかオツサン、‘銃刀法’って知らねーの?この日本では一般人が剣なんか持つてちゃ駄目なんだよ」

「そんなもんは知らねーが、俺は一応‘一般人’じゃあないんでね!!」

そう言うと、男は俺に切りかかってきた。

ガキンツガキンツガキンツ

「ふっ!!!」

「くっ!!!?」

一系乱れぬ攻防戦。

相手の剣の勢いを殺しつつ、次々と来る斬撃を受け止める。そして隙が出来れば攻撃を繰り出す。

ガキンツ!!

十数の攻防の後、男の長剣を尻払った俺はその一瞬の隙を逃さなか

った。

「（泉式劍術口のハ！！）」

利き手である左手で柄をしっかりと握ると、荒れ狂った風のような動きで攻撃を仕掛ける。

みだれかせ
「乱風！！」

「このっ！」

男も負けじと長剣で対応するが、幾つかは体にヒットした。

「ぐっ！！？」

男はバックステップで再び間合いをとる。

「はあ、はあ・・・小僧、なんだその武器は？木じゃあねえな」
男は荒い息でそう言った。

「生憎、この竹刀は特注品でね。中に金属が埋め込まれているから、折れることはないのさ」

俺は律儀にも彼に教えてしまった。

それが間違いだった。

「ほう・・・なら、その金属までは切れるってか」

そう言つと、ニヤツと恐ろしい笑顔を浮かべた男は再び切りかかってきた。

「なっ！！？」

今までの経験（十数年そこそこしか生きていないが）が、俺の脳内で警告音を発している。

俺はその攻撃に危機感を感じ、受け流そうとしたが

ガッ

「なっ！？」

なんと竹刀の竹に長剣がめり込んでいた。
それはさっきより重い一撃だったのだ・・・

「（まだ本気じゃなかったのか！！？）」

油断していた・・・相手はまだ全力ではなかったのか！！

「ちっ！！」

竹刀を無理やり回転させ長剣から逃れると、俺は間合いを取った。

いくら折れないような金属棒がこの竹刀の芯になっているといっても、武器のスペックの差は明らかだ。

現に俺の竹刀は既に多くのヒビが入っている。

「やっべえ・・・」

焦りの言葉がつい出てしまうほど、俺は動揺していた。
冷や汗が頬をつたってゆく。

「どうした小僧、さっきまでの威勢は？」

ニヤリとする男の顔が憎らしかった、と同時に俺を挑発しているこ

とに気付いた。

「（落ち着け、俺。何か打開策があるはずだ）」

俺はヒビの入った竹刀を見つめた。欠けた竹が当たりに散らばっている。

竹刀一部は完全に竹が剥がれていた。

そこから見えたモノは・・・

「！？こ、これは・・・」

おもしれえ。

俺はフツと笑うと、竹刀を握り直し男に向かって竹刀を振り下ろした。

ガキンツ

「ほう・・・息を吹き返したか・・・だが、そんな刀では勝てんぞ
オモチャ
！！」

ガキンツガキンツガキンツ

「くっ！たしつ、かにっ、そうだなっ」

ガキンツガキンツガキンツ

だんだん深い亀裂が入っていき、今にも壊れそうな竹刀・・・

「だがっ！！」

俺の竹刀と男の長剣は勢いよくぶつかった。

ガキーンッ

ピシッピシッピシッ

「これがコイツの『真の姿』だあっ！！！」
「なにっ！」

パリーン！！

竹刀の竹は砕け散り、そして中から現れたのは・・・

黒く光る刀身、柄の細工、そして・・・『風』を表現するような形をした鐔つば。

刀の名は、『風流丸』ふうりゅうまる（と、刀身に刻まれていた）。

§

§

「おい・・・」

「う・・・うーん」

「しっかりしろ！美琴！」

「イタッ！」

おでこの痛みで気絶していた私は目を覚まし、目の前にいた正宏でありそれはデコピンだと分かった。

というか・・・

私は羞恥心と怒りで震え、拳を握り締めていた。

正宏にいきなり胸を掴まれた・・・それだけではない、芹沢直人に恥ずかしい声を聞かれてしまった・・・

「まゝさゝひ」

「五月蠅いわアホ女!!」

「イタッ」

あれ・・・？もしかして、本気で怒ってる？

「当たり前や！なに勝手に一人で行動しとるねん！ちよつとそこに正座しなさいっ!!」

「はうつ」

「そもそもお前は・・・」

こうなった正宏には逆らえない。

私は長い説教を（実際は約五分だったが、固いコンクリートの上に正座するという痛みによって私には長く感じた）聞かされてしまった。

「う・・・ぐずっ」

「分かったか、美琴！」

「分かりました、すみませんでした」「分かればよし」

そうだね・・・私が先走って単独行動したからだよね、胸だって・・・

胸だって？

「・・・ねえ、正宏」

「なんや、反省したか」

「うん、私が単独行動をとったことは反省しているよ。でも・・・」
「でも？」

ピキッ

「私のむ・・・胸をつ・・・掴んだ理由にはならないんじゃないかな、『正宏君』？」

今の私はよっぽど怖い顔をしているのだろう、正宏は先程とは打って変わってビクビク震えていた。

「え・・・と、じく」

「一発逝つとく？」

「スミマセンでしたあっ！！」

正宏は素早い動きで見事な土下座を決めていた。

ま・・・まあ、正宏に掴まれて悪い気はしなかったし・・・で、何考えているんだ私／＼！？

私の式神は、術者が発動してから消えるまでの出来事、つまり会話や五感で感じた情報を、消えたと同時に術者に送ることが出来る。今回の場合は消える前の一番強い印象となった『胸を掴まれた』という情報が大半を占めてしまい、その時の記憶と共に感覚までもが術者である私の体に直接伝わってしまったのだ。

実は、式神を使うのは命を伴う危険性がある。

式神は術者が自ら消すか、外部からの強い衝撃により消えてしまう。

つまり、式神が例え重傷を負うような怪我をしても、消えるだけで術者が怪我を負うことはない。

ただ・・・もし、それが私の記憶に強く残りそうなものであれば、もしかしたら精神が崩壊するかもしれないのだ。

まあ、今回は胸を掴まれ、その衝撃で式神は消えてしまったのだから大丈夫だが・・・

って思い出しちゃった／＼／＼。

と、とにかく、落ち着け私。深呼吸。深呼吸。すゝはゝすゝはゝ。ふう／＼

「ま、まあとにかく、今度からは別の方法にしてくれない？わ、私も悪かったし」

ポカーンとして驚いている正宏を見て、何か変なこと言ったかしらと私は焦ってしまった。

「な、なによ」

「いや、許してくれるならありがたいのだが、今直人のことを思い出してな・・・」

「えっ」

な、なんでコイツは別のことを考えているのかなあ、何故かまたイラッとしてきた！

「美琴、お前倒れる前に直人がどこに行こうとしてたか知っとるか」

あ・・・

「彼・・・もしかして、‘使徒’の連中に会ってるかもしれない！」

「なんやと！？どういうことやそれ！？」

私は彼等を追って見ていた一部始終を正宏に話した。

「直人のヤツ、その娘たち助けに行きよったんか！？」

「でもいくらなんでもそんな」

「アホか！あいつは人一倍正義感が強いやつちゃでなあ！」

もしかして、一般人を巻き込んだじゃった！！？

t o b e c o n t i n u e d . . .

第一章 #4【一太刀の心】（後書き）

（あとがき劇場）（第二回）

直人「正宏、この‘刀’見てくれ」

正宏「これはっ！！お前どっからパクって来てん！！」

直人「お前本文見てないだろ！」

正宏「そんなことないって」

直人「まあいいとして。これって本物かな？」

正宏「どれ、おじさんに貸してみなさい」

チャッ

正宏「おお、これは本物じゃないのか？すぱっと何でも切れそうやないか」

直人「やっぱり本物かな」

正宏「で、なんでお前が刀持つとるん？」

直人「やっぱりお前、絶対本文見てないやろ！！」

- f i n -

ども、氷雨です。

皆さんに習って“あとがき劇場”なる物を作ってみたのですが・・・

正直失敗しました

でも、これからも書くこうと思っています。おもしろみの欠ける内容かも知れませんが、暖かく見守っていてください。よろしくお願いします！

第一章 #5【天使の羽根】（前書き）

すみません、少し更新が遅れました!!

一日おきに更新するのって、結構難しいですね・・・

今回、身をもって知りました。

それでは、本編をどうぞ！

第一章 #5【天使の羽根】

#5【天使の羽根】

日本刀‘風流丸’を手に入れた俺は、この戦いに勝算を見いだしていた。

というか、よく検閲に引つかからなかったな・・・

「フツ・・・面白い。小僧、名は何という？」

「俺は芹沢直人だ。ナオト・セリザワって言った方がいいかな。オッサンは？」

「ワードル・アルセイヌだ」

どうやらここら一带にいる人は俺を除いてみな外国人のようだ。

後ろで倒れている女の子は眼の色はまぶた瞼を閉じているので分からないが髪は黒色。でも日本人ではないような気がする。

そしてその倒れている彼女を守ろうとしていた女の子は灼眼に明るい赤髪。どうみても外国人だ。

長剣の男と何故か俺達の闘いを見ているだけの細身の男は、白髪に深緑の眼とライトブルーの髪にブラウンの眼、明らかに外国人だ。

って今はそれどころじゃないって、闘いに集中しなければ。

「ナオト・・・だっけ。ありがとう助けてくれて」

そう言ったのは、灼眼の彼女だった。

「いや・・・構わないさ。もう退けねーし」

「ナオト、気を付けて。信じられないかもしれないけれど、後ろにいる男は魔術を使うはず」

「マジユツ」なんだそれは？

「それって・・・っと！」

「よそ見してるんじゃないねーぞ小僧」

ガキンッ

「あつぶねえー」

「よく捉えられたな」

何とか男の攻撃を防いだものの、まだまだ長丁場になりそうだった。

そう思っていたその時だった・・・

「ふう・・・時間ですアル」

後ろにいた男はいきなり一言、そう言った。

長剣の男は何故か肩を落とすようにして、こう言った。

「すまねえな、ナオト。俺達には時間がないんだ」
「えっ」

グサッ

「ぐはっ！！？」

いきなり腹部に強烈な痛みが走った。

「なっ・・・」

下を見ると・・・

魔法陣みたいな幾何学模様が描かれている地面から鎖が延びていて、俺の腹にグサリと刺さっている短剣に繋がっていた。

後ろの男が言った。

「さじょうれんげき鎖状連撃」。鎖を操って地中から襲撃する土系統の魔術です。もつとも、あなたには何のことか分からないと思いますが・・・あなたの後ろにいる彼女なら分かりますね」

「土系統の魔術・・・しかも高等魔術・・・」

灼眼の彼女には彼の言っていることが理解出来るらしい。

最初からおかしいと思っていた・・・

周囲の地面には何かが刺さった跡、そして手を出してこない長剣の男の背後にいた男は動きすら見せなかった。

そしてこれが魔術・・・

さっきまでは彼女の言葉が理解出来なかったが、ようやく分かった・・・

いつでも俺を殺れたってことかよ・・・

「がつ！」

カタッ

ドサッ

「キミっ！！？」

急に短剣を抜かれた俺は血を吐き刀を取り落とすと、崩れるようにその場に倒れた。

俺、大量出血で死ぬ・・・

せつなくなら、彼女達を逃がしてから死にたかった・・・
そんな思いとは裏腹に意識が薄れてゆく・・・

「ナオトっ！ナオトっ！」

彼女が駆け寄る足音が聴こえる・・・

俺は朦朧とする意識の中、彼女の涙を見た・・・

§

§

まだ・・・

今度は関係ない彼、ナオトまで巻き込んでしまっていた・・・

「ナオトを助けなきゃ・・・」

その時の私は自暴自棄になっていたのかもしれない。

彼の側に駆け寄るとしゃがみ込んで右ポケットに入っている、遮石
'を握った。

これを遠くに投げれば、‘遮石’の効果はなくなり、魔術を使えることが出来るかもしれない・・・

ふと首から垂れ下がるペンダントを魔石を見た。

私なんかが持っているべきではなかった。

私がそう思っていると、

キユオオオーツ

「えっ!？」

突然、‘魔石’が青色く輝きだした。

すると、聞いたことのない女性の声が聞こえた。

「魂の波長、一致。起動パスワードを入力してください」

・・・え？なんのこと？

スッ

パニックになっている内に、誰かの手が輝く‘魔石’を掴んでいた。

「な、ナオト!!？」

その手の主は、ナオトだった。

手以外は一切動かさず、まるで‘魔石’の存在を感じているように、ところどころ血のついた手でしっかりと‘魔石’を握っていた。

「‘片翼の堕天使’」

それは彼の口から出たコトバだった・・・

「パスワード、一致。プログラムを開始します」

いったいなにが・・・何が起きているというの!!？

§

§

真っ暗だ・・・なにも見えない・・・

これが死後の世界だろうか。

いや、違う。何かが違う。

なせなら・・・

目の前にあの白銀の髪をした少女が立っていたからだ。

真っ暗なはずなのに、彼女だけはくっきりと見える。まるで彼女自体が光っているようだ。

「アナタは死ぬことが怖くないの？」

俺は久しぶりに彼女の透き通るような声を聞いた。
どうやら恐怖を感じていない素振りを見せる俺に、彼女は疑問を
持ったようだ。

「いや・・・怖くない人間なんていないさ。ただ・・・」

「ただ？」

彼女は先を促すようにそう言った。

「ただ・・・俺は目の前で泣いていた女の子を救いたかった。それで全力を尽くした。・・・悔いはない」

「本当？」

彼女は何もかも見透かすような碧眼で俺を見つめ、可愛く小首を傾げてそう言った。

「無いつて言っちゃあ嘘になるか・・・」

そうだ。結局、俺が死んだことによって彼女はあの男に殺されるだけでなく、俺の死を自分のせいだと思うだろう、俺はより一層の苦しみを彼女に与えてしまった。

「・・・彼女を救いたい。救いたいんだ」

俺は本当の気持ちを彼女に話した。

彼女に話せば何とかなるような気がしたからだ。

それを聞いた彼女はにっこりと微笑み、こう言った。

「それがアナタの『答え』。他人を思い、仲間を助ける力、ワタシはアナタに見せてもらいました」

彼女はスッと虚空を指差した。そこには・・・

この空間なかで異彩を放つ、輝く青色の丸い石があった。

「手を伸ばし、触れてみなさい。そうすれば道は開かれます」

彼女の言うとおりには俺は何故か重い腕を必死に伸ばし、ソレを掴んだ。

すると、彼女とは異なる声が聞こえた。

「魂の波長、一致。起動パスワードを入力してください」

俺は何故かそのパスワードとやらを知っていた。それは自然に口から出たコトバだった。

「『片翼の墮天使』」

「パスワード、一致。プログラムを開始します・・・」
フツ

「あれっ？」

いきなりその石はこの世界から消えてしまった。

「大丈夫よ、現実世界に戻っただけ。彼女は優秀だから、全て任せればいいわ」

グラッ

「うわっ」

な・・・なんだ今の地震は！？

「そろそろ限界みたいだね」

そう言うのと、彼女の姿がだんだん揺らいでゆく・・・

「限界って！？」

「アナタが現実世界に戻るってこと。今の振動はアナタの本体が息を吹き返し、封印されていた‘魔力炉’が動き出し、‘魔力’の循環が始まったからよ」

え？なんだ？その‘魔力炉’や‘魔力’とは？

「分からないことはさっきの彼女に聞くといいわ」

「青色の石のことか」

「そう。彼女の名は‘アリア’。そう名付けてあげて」

あの不思議な石にも意思があるということか？（いや、ダジャレじゃないから。）

「あ・・・ああ、‘アリア’だな。分かった」

とりあえず、俺は了承しておいた。

「あとはよろしくね、ナオト。それと‘現実世界’に戻っても、あまり驚かないでね」

最後の言葉はよく分からなかったが、何故彼女が俺の名を知ってい

るかを、不思議なことに俺は疑問に思わなかった。

「一つだけいいかな」

彼女にはいろいろ聞きたいことがあった。

でも時間がないらしいし、また彼女に会える気がした。
だからこれだけは・・・

「キミはいつたい・・・」

すると、彼女は驚くべき返答をした。

「ワタシはアナタ。アナタはワタシ。過去と未来の存在よ・・・」

「えっ」

ど、どういうこと？

「ちょ、待って」

だんだん彼女の姿と共に、彼女の声が遠のいてゆく・・・

「アナタがまた困難に陥ったとき、また会えることを祈りマシヨウ・

・・・」

「待ってえーっ!?!」

俺の叫びも空しく、彼女はフツと消えた。

俺はどうなってしまっただろう・・・

急に辺りは明るくなりだし、俺はその眩い光に目を閉じ、その世界での俺の意識は途絶えた・・・

§

§

プツッ

シュルシュルシュル

「えっ？」

今まで切れることがなかったペンダントの楔はいきなり切れ、まるで意志を持っているかのように魔石を握るナオトの右手に絡みつぎ、眩しい光を放った。

コアアーーッ！

眩しさのあまり視界を遮っていた腕を、光が収まったのでのけると・・・

彼のその右手首にその魔石が埋め込まれている腕輪がはまっていた。さらにその魔石からの声が響く。

「『《天使》補助プログラム』を起動します」

「天使」！！？それって・・・」

私はそれを知っている。でもそれって・・・

マスター
「主の生体反応が著しく低下しているため、緊急魔力ブースターを使用し、肉体の再構成を行います」

もしかして、ナオトを救えるのか！？

だが、‘使徒’の二人組は待つてはくれない。

「ハッハッハッ！！こいつが標的だったってわけか。そんじゃ、何か起こす前に止めねえとなっ！！」

「そうですね。私は万が一の為、詠唱をしておきます」

彼等はそう言うのと攻撃態勢に入り、長剣の男は長剣をこちらに向け倒れているナオトに襲いかかるうとする。

が、それは無駄に終わった。

「敵勢力を確認。自動防御魔術を実行します」

ズザザザッ！！

「障壁っ！？」

凄まじい音と共に、私達と使徒の連中の間に吹き荒れる風が生まれ、彼等の行く手を阻んだ。

ブラストシールド
‘風の障壁’。風によって敵の攻撃を阻み、近寄る敵を切り裂くと

いう風系統の高等魔術だ。

あの使徒の連中は壁の向こうで悪態をついているだろう・・・

後ろにいた魔術師は土系統の高等魔術が使えていたが、風系統とは相性が悪い。いくら強力な魔術を使っても、この障壁は破れないだろう。

そんな魔術をこんな所で見られるなんて・・・

私は炎系統の魔術が得意で、その系統なら高等魔術も使えるし見たことがあるのだが、風系統の魔術師はあまりの身近にいなかったの
で、見たことがない。

だが何よりも驚いたことは、即に魔術を発動させたことだ。
つまり、

「詠唱破棄!？」

こんな高度な魔術を詠唱破棄で始動出来るということとは、詠唱の代わりとなる方法をあの魔石が使ったに違いない。

私にとって‘使徒’の連中がこちらの世界で魔術が使える謎よりも魔石と彼・・・ナオトの正体が気になってしょうがなかった。

本当に、彼はいったい・・・

風の障壁を見ていた私はふとナオトの姿を見ようとすると、いつの間にか彼の姿は真っ白な何かに隠されていた。

そして・・・

魔石からの声が響き、彼が回復したことを告げた。

「治療終了。バイタル正常、異常なし。簡易魔術障壁を解除します」

その合図と共に、彼を覆っていた障壁であつた白い壁は割れ、彼が姿を現した。

パリーン

・・・？

あ・・・れ・・・

眼がおかしくなったのかな。

いや、違う。そんなはずは・・・

私はこの状況を、一言で表した。

「誰？」

そこにいたのは傷の癒えた彼の姿・・・

ではなかった。

眠るように眼を閉じている、少女、。

美しく、流れるような白銀の長髪。
ロングヘア

そして・・・

背中から生えているように見える、真っ白な翼。

「天使」・・・」

その姿は神々しく、私はまばたきさえ忘れていた・・・

t o b e c o n t i n u e d . . .

第一章 #5【天使の羽根】（後書き）

（あとがき劇場）（第三回）

直人「なにっ！ “死亡フラグ”は俺だったのか！！？」

正宏「そうらしいな。・・・これでようやく、僕が主役の座を！！」

直人「んなっ！！まだあきらめてなかったのかい！！」

そ、そうはせんぞ！だって、まだ五話なのに主人公が変わるとか、ありえないから！！」

正宏「わからんで？」

直人「・・・たしかに、あの作者なら殺^やりかねんな・・・」

正宏「だろー」

氷雨「そうですねー。あんまりふざけて談笑していると、あなた達二人とも消えることになりますよ

・・・この削除キーで」

直人&正宏「（怖^こえーっ！！！！）」

氷雨「おもに眠りかけてポチツと」

直人「なおさら怖えーよ！！！！」

正宏「ボケの座を取られたーっ！！」 ガクツ

直人「はあ・・・二倍疲れる・・・」

- f i n -

ようやく物語に動きが出てきました。
でも先は長そうです・・・

第一章 #6【覚醒する力】（前書き）

また更新が遅れました・・・

ようやく主人公の平凡な日々が崩壊する瞬間が訪れました。

では、本編をどうぞ。

第一章 #6【覚醒する力】

#6【覚醒する力】

現れた‘天使’のような少女は地面から数センチ浮いており、どういふわけか眼を開けようとしない。

だが・・・いっこうに彼、ナオトの姿が見当たらない。

不思議に思っていると、彼女の右手首に目がいった・・・

あの‘腕輪’がはまっている

すると、魔石の声が響いた。

「現在、主の意識は覚醒に至っていないため、緊急措置として‘ユニゾン’を行います」

‘ユニゾン’・・・これも知っている言葉だったが、私は心底驚いた。

普通は戦闘の際、魔術師は‘パートナー’となる剣術に優れた剣術師が必要となる。

パートナーとは、魔術師がより強力な魔術を紡ぐのに精密な魔力の操作、及び大きな魔力を使うためにマナを蓄積し、その魔術に必要な‘詞’^{ワード}を詠唱する時間を稼ぐため、体術及び剣術に優れた‘剣術

師’が‘魔術師’のサポート…魔術師の守護をすることである。

ちなみにリーザは魔力が低いことや魔術より剣術が得意なことから、剣術師の資格を得て、騎士団に入団した。（基本、騎士団は剣術師が入団することが多い。）

その他に、‘剣術師をパートナーとしないで闘う方法’もある。

その方法が‘インテリジェント・ハーツ’という知能がある特殊な魔石を使用し、その魔石に自分が使用する魔術のマナの蓄積や詠唱を予め記録しておき、あらかじめ実戦で魔術を詠唱無しで始動し隙を造らない・つまり剣術師の守護を必要とせずに闘うという方法だ。

だがその‘インテリジェント・ハーツ’を使用する魔術師は、今現在ほとんどいない。

何故なら、‘インテリジェント・ハーツ’一個体に必要な技術と資金は莫大なものであり、資金のある財界人でさえ優秀な技術者がいなければ手に入られない代物であるからだ。

即ち珍しい故に、魔術師が‘インテリジェントは・ハーツ’を使用する定義だけは、広く知られている。

その内の一つが‘ユニゾン’である。

‘ユニゾン’とは、‘インテリジェント・ハーツ’と意識を共有、謂わば融合することにより、より魔石の力をフルパワー引き出せる。

だが、それはある程度危険をはらんでいるということである。融合するということは、魔術師の身体を半分乗っ取ることだ。つまり、本当に信頼のおける‘インテリジェント・ハーツ’でなけ

れば、‘ユニゾン’はしてはいけない。いや、魂が拒否反応を起こし、‘出来ない’のだ。

・・・ところがこの場合はどうだろう？

あの少女が突然現れ、尚且つ未だ意識が無いらしい。にもかかわらず、いきなり起動した‘インテリジェント・ハーツ’らしき魔石とシンクロすることが出来るはずがない。

はずがない・・・のだが。

「シンクロ率85%。許容範囲。」

シンクロ率85%！！？

私には今目の前で起こっていることが、理解出来なかった。

「‘迎撃プログラム’を始動し、敵戦力を無力化します」

すると、彼女の目蓋が徐おもむろに開いた。

現れたのは全てを見透かすような青い瞳。

だが、少女自体の意識が戻っていないことから、少し虚ろだった。

彼女は背中に生えた羽根をたたみ、地面に降り立った。

そして、地面に落ちていたナオトの武器・・・‘カタナ’を手にとった。

一体彼女は何者で、何をするつもりなのだろうか・・・

§

§

「な・・・なんだアレは？」

「さあ・・・」

僕と美琴は、急いで‘使徒’の連中を追いかけて、この路地裏までたどり着いたのだが・・・

‘使徒’らしき二人組の前には、風の壁らしきものが出現していた。おそらく彼等が意図的に発生させたものではないだろう。つまり風の壁の向こうには、彼等以外の何者かがいるわけだ。

「琴美、今は様子を見よう」

琴美は小さくコクつと頷くと、護符を使って僕達の姿を隠した。

「おそらく直人はあの壁の向こうにいるのだろう。で、既に美琴が見たというその娘・・・魔術師ともう接触しているってことか？」

「おそらく・・・」

「はあ・・・」

僕は頭を抱え込み、舌打ちした。

直人には僕達とは関わって欲しくなかった。だが、魔術のことを知られてしまったては、僕達に協力してもらわな

ければならない・・・強制的に。
それに、彼は剣術に秀でている。おそらく、戦闘に駆り出されるだろう。

あいつとは普通の友達という関係でいたかったのに・・・

「ごめんね正宏。私が彼を止められなかったから・・・」

不意に美琴はそう言ってきた。

「なんで美琴が謝るんや。直人が勝手に行動しただけやろ」

そうだ、彼女は悪くない。

悪いのはあのアホだ。

ズバババツ・・・

「正宏、風が収まったわ・・・」

先ほどまで荒々しく吹いていた風は収まって、だんだんと向こう側が見えてきた。

が、

「誰、あの娘？」

美琴から聞いた黒髪と赤髪の二人は確認できたが、あの少女・・・銀髪に碧眼の背が低めの少女のことは聞いていない。
おそらく、今の反応で美琴もしらないのだろうが。

何よりも驚いたのは背中に見える羽根みたいなものと、日本刀を片手に握りしめていることである。
それに、直人の姿が見当たらない。

と、少女が刀を片手に行動にでた。

タツ

ブシューッ

「なっ！！？」

「ひっ！！？」

それは一瞬の出来事だった・・・

宙に飛んだモノは、長剣を構えていた男の腕だった。

§

§

急に背後の風の音が止んだので、私は風の障壁が破られたのかと思ったが、それはその魔術を使った彼女自身のものであり、障壁が消えたと同時に彼女の姿が小さな風の波紋を残して消えた。
そして私のすぐ隣を吹き抜ける風。

「ぐわあっ！！！」

次の瞬間、長剣の男の声と共に何かが斬れる音が生々しく聞こえた。

ブシューッ！

「ガアアアアアアアッ！！」

生々しい音と共に宙に飛んだのは男の長剣を持った右腕。

男は痛みのみあまり声にならない声を荒げ、その場にうずくまった。

「な、何っ！？？」

今まで冷静でいた後ろの男は、初めて驚きの顔を見せていた。

なんてスピード！

彼女は瞬間的に私の横を通って長剣の男の前に立ち、手に持った力タナで男の腕を斬ったのだ。

「くっ、砂地獄、！」

後ろの魔術師は「砂地獄」で彼女を捕らえようとしたが・・・

バザッ

「飛んだ！！？」

彼女はその羽根を広げ、空中へと躍り上がった。

ウインド・カッター
「『風の刃』」

「インテリジェント・ハーツ」の彼女がそう呟くと、風で形成された見えない無数の刃が彼に向かって飛んだ。

サンド・ウォール
「『土壁！！』」

ズガガガガッ！

地面から現れた土の壁によって幾つかの刃は防いだが、全ては防ぎきれてはいなかった。

「ぐっ!!」

土の壁が崩れると、魔術師は血が伝う左腕を押さえていた。

「ちっ……」

そう舌打ちした彼は、落ちていた「右腕」を拾いうずくまっている男に近づいた。

「アル……撤退だ」

「ぐっ……ああ……」

彼の言葉に男は弱々しくそう応えようと、転移魔術を使い私達の目の前から消えた。

「敵戦力の撤退を確認。戦闘モードを解除します」

その声と共に、彼女の羽根は消え、手に持っていたカタナも消えた。すると、彼女はこちらを向いた。

「あなたがローウェント様ですね」

「えっ、あ、はい」

‘インテリジエント・ハーツ’の彼女は どうして私がローウェントの姓を持つ者であることを知っているのだろうか？

「私の起動前からペンダントの中から世間の情報を記録していましたから」

あ、なるほど。

「それよりも、大事なことを忘れていませんか？」

え？

大事なこと？

スツと彼女が指さした方向をつられてみた私は・・・

「リーザ！！？」

リーザが倒れたままであることを、忘れていたことに気づき、急いで彼女のもとに駆け寄った。

「スー、スー」

ね、寝ている・・・

幸いなことにどうやら傷は浅かったらしく、さっきまで気絶していただけだったようだ。

まったく、心配かけて・・・

「大丈夫ですか、ローウェント様？」

あれ？

いつの間にか、私はまた涙を流していた。

自分が情けないや何やらで、気持ちがちや混ぜになっていたようだ。

「あ、うん、大丈夫だから気にしないで」

それを聞いた彼女は一呼吸おいてからこう言った。

「とりあえず、回復魔術を使います」

え？

「アナタ（『インテリジェント・ハーツ』）、どれだけクオリティが高いのよ！！？」

「回復魔術、イソセント・ヒール心の治療、を始動します」

リーザの横に立ち両腕を前に上げると、幾何学模様の魔法陣がリーザの真下の地面に現れ、彼女の傷は逆再生しているかのようにみえる塞がり、着ている血や切れ目のある服以外は完全に元に戻っていた。

「スゴい・・・」

私が啞然としていると、リーザはゴソゴソと身じろいだ後、上半身を起こして黒い瞳を開けた。

「あれ？私は・・・」

「リーザ！！」

「！！！？えっ、フィー？」

私は喜びのあまり、治ったばかりの彼女に抱きついてしまっていた。

「よかった・・・ホントによかった・・・」

みつともなく涙を流しつつ、私は彼女をよりいっそう強く抱きしめた。

「すみません・・・心配かけて」

「バカあ・・・」

子供のように泣く私を、彼女は優しく頭を撫でてくれた。

「それで・・・彼女は？」

「ぐすつ・・・ふえ？」

そういえば・・・

後ろに立っている私はリーザからすこし離れて白銀の髪の彼女をみると、彼女は一点を凝視していた。

「前方100メートル先に生体反応が2つ有ります」

「え？今の声って・・・」

事情を知らないリーザにとって、彼女が口を動かしていないのに喋っているかのように見えたのだろう。

「説明は後ですから。それよりも・・・」

もしかしたら、まださっきの二人組の仲間が・・・

「いやあ、すまんすまん」

男の声の後、影から現れたのは私達（私とリーザ）と同じくらいの歳の少年と少女だった。

「あなたたちは・・・」

「いや、別にさっきの奴の仲間やあらへんで」

変な日本語で話す男だな・・・

「ああっ！！今変な日本語やと思たやろ！大阪弁は立派な日本語や！！」

つまり訛りということか？

「まあ、ええわ。僕等もあの‘使徒’の連中に苦い経験を積んでるから、できたら手を貸して欲しいねんけど・・・」

え・・・どうして化学世界の‘住民’が、‘使徒’のことを・・・

『ファイルス様』

『えっ何？』

私はいきなりのリーザからの念話に驚いた。

念話とは、魔術の心得がある者なら誰でも使える、伝えたい相手のみに言葉を伝えるという、一種の簡易通話である。

『この人達とは関わらない方がよさそうです。どういつ経緯で、使徒、の事を知ったのか分かりませんし』

『「私も賛成です、アルバーノ様」』

すると突然、‘インテリジェント・ハーツ’の彼女が話に入ってきた。

『「すみません、通話を傍受する事が出来ますので」』

『あなた、どうして私の名前を・・・』

もちろんペンダントの中から情報を集めていたなら、彼女は知っているはずだ。

『まあ、その話しも後で・・・』

私が理由を知っていることを察してか、リーザは今はこれ以上聞くとしなかった。

『「逃げます」』

「強制転移魔術を開始します」

「えっ」

「ちょ、まっ」

「なっ」

「ふえっ」

次の瞬間、視界が・・・真っ白になった。

そして

私とリーザ、白銀の髪少女は、とある部屋にいた・・・

t o b e c o n t i n u e d . . .

第一章 #6【覚醒する力】（後書き）

（あとがき劇場）（第四回）

正宏「あーっ！！直人の奴、何処かに行ってもたわ！！このコーナードないすんねん！！！！」

インテリジェント・ハーツ（以下‘イ’）「直人様が変わって、私がお相手します」

正宏「おお、サンキュー。助かるわ！

・・・って、誰やねん！！」

イ「秘密です」

正宏「・・・話が続かんやないか！！」

イ「そこを何とかするのが、プロってものです」

正宏「そ、そうやな！それじゃあ、直人のツッコミの甘さを語るで！！」

まず、僕やつたらな・・・・・・・・・・」

イ「な、長くなりそうなので、ここら辺で失礼します」

タタタタッ

正宏「ちょ、話を最後まで聞けえーっ！！！！」

- f i n -

第一章 #6・5【とある部屋】

#6・5【とある部屋】

「ここは・・・」

知らない部屋だ。

「ここは主の部屋です。^{マスター}主の記憶の中で一番印象に残っており、かつプライバシーが保たれる場所です」

へーここが・・・

私達は部屋を見回していると、土足でいることに気づき、取り敢えず靴を脱いだ。

「すみません、主の体を支えてもらえませんか。^{マスター}‘ユニゾン’稼働限界時間が来ました」

「えっ、ちよつと」

そう告げた彼女、‘インテリジェント・ハーツ’は主の体から‘ユニゾン’を解き、少女の体がフツと崩れたのを見て、私は慌てて後ろから支えた。

彼女の体は力が抜けたようにふにやふになっいて、規則正しい呼吸が聞こえるのでおそらく眠っているのだろう。

私は彼女の体が軽いことに気付き、リーザが手伝おうとするのん断って、この部屋にあったベッドに彼女を顔に白銀の髪が掛からないようにして寝かせた。

「すー、すー」

か、可愛い……

私は彼女の愛らしい寝顔を見てそう思ってしまった。

おっと、いけないいけない。

隣でリーザが頬を染めて彼女を仰視しているが、この際無視しよう。

それにしても……

「この子は……何者なの？」

おそらくその事についてよく知っているであろう、インテリジェント・ハーツ'に聞いた。

「すみません。主の許可が降りなければ、お教えすることは出来ません」
マスター

予想通りの反応……

まあ、確かに管理者権限は主である彼女が握っているから、仕方がないか……

「じゃあ、彼女が目を覚ましてからにするわ」

「はい、すみませんローウェント様」

別に謝らなくても……律儀なのね。

「それじゃあ、私達は一旦アパートに戻りましょうか。リーザの服も替えなきゃ」

「え……あ、はい、フィレス様」

リーザはまだ彼女に見入っていたらしいが、私の声で正気に戻ったようだ。

「じゃあ、また後でくるわ」

「はい、お待ちしています」

私はリーザの手を取り、気持ちよさそうに寝ている彼女をチラッと見てから部屋を出た。

彼女は「何者」で、^{ナオト}彼はどこに消えたのだろうか・・・

その答えは数時間後、明らかになる。

t o b e c o n t i n u e d o n t h e n e x t c h
a p t e r . . .

第一章 #6・5【とある部屋】（後書き）

（あとがき劇場）（第五回）

直人「なんか今回、短くないか」

正宏「お、復活したんかい直人！（チツ）」

直人「おい、今“チツ”て言ったよな！」

正宏「まつさかあゝ。正宏君はそんな薄情な人間じゃおまへんで。いい人やなあゝ正宏君」

直人「なんか自己顕示してるよ、この人！！」

正宏「ま、これedyやく僕の活躍の日々が始まるんやな！」

直人「（どこまでもポジティブな人だゝ！！）」

- f i n -

ようやく第一章が終わりました・・・

ここまで来るのに苦労しましたよ、ほんと。

次回から第二章が始まります。

まあ、主に「土台固め」ですね。

ということで、次回からも「トラブルメーカーな天使」をよろしく
お願いします。

あと、ご意見・ご感想もよろしくお願いします。

第二章 #7【異なる自分】（前書き）

ようやく第二章に入りました！

今回は直人が今の自分の姿に気付く話ですね。
では、本編をどうぞ！

第二章 #7【異なる自分】

#7【異なる自分】

目が覚めるとそこは自分の部屋のベッドの上だった。

「生きてるんだ・・・」

少し自分の声がおかしいと思ったが気のせいだろう、胸に手を当てて自分の心臓の鼓動を感じ、生きている実感をもった。

「（全て、‘夢’だったのか？）」

現実に魔術なんて存在するはずがない。

あまりにもリァリテイのある夢だったので、自分がイマジネーション豊かな人間だったのかと驚いた。

窓から差し込む夕日の光が眩しい。

どこまでが現実で、どこからが夢だったのか。いつから俺は寝ていたのだろうか・・・

俺は様々な疑問を抱きつつ、何気なく寝返りをうつた。

「？」

ふと感じたこそばゆい感覚。それは頬からくるものだった。

その原因を探してみると、それは髪の毛だった。

しかも、白銀’の。

驚いて上半身を起こすと、頭が引つ張られる感覚を覚えた。

辺りを見回すと長い白銀の髪が散乱し、幾らか自分で踏んづけていることに気付いた。

「えっ、なんだこれ！」

自分の出した声の高さに驚き、俺は慌てて口を塞いだ。

「（な、なにがどうなって・・・）」

俺は自分の今の姿を見て驚いた。

俺は今、見たことのある白い無地のワンピースを着ている。

この長い白銀の髪といい白いワンピースといい、細い腕といい・・・

まさに夢の中で見た白銀の髪の少女そのものだった

「まさか・・・」

俺は急いで飛び起きてベッドから降りた。

やはり視界が低い。どうやら背が彼女並みに縮んだようだ。いや、おそらく彼女と全く同じ背の高さなのだろう。

俺は急いで本棚に伏せてある小さな手鏡を手に取り、自分の今の姿

を見た。

美しい白銀の長い髪に全てを見透かすような青い瞳、華奢な体つきだが瞳と髪の色が少女の存在感をよりいっそう強くしている。俺が自分の心臓の鼓動を確かめた時にその事に気付かなかったのは、小学生並みのぺったんこな胸のせいである。

だがそこだけが男か女かを決め付けられる所ではない。

俺は躊躇しながらも男女を区別するあそこへと手を伸ばした。

スカツ

ない・・・

俺はあの少女・・・完全に女になっていた。

§

§

「・・・ということで報告は終わりや。質問はあるか？」

皆、神妙な面もちでいたが、誰一人手を挙げる者はいなかった。

「それじゃあ解散や」

僕の言葉と同時に静まり返っていた大部屋はガヤガヤと騒がしくなった。

今、僕は今回の「黒月の使徒」の捕縛ミッションについて、大まか

の話を‘仲間’のみんなに話していた。

‘仲間’とは、異能の力を持つもの……つまり魔術師としての才能をこちらの世界で持ってしまった者で構成された組織のことである。

‘仲間’の多くの人の親が、魔法世界で起きたある戦争が原因でこの化学世界に身を隠した魔術師である。

ちなみに僕の場合は父、木内 才たけうちが魔術師である。

まあ、細かい話はまた後日。

「それで正宏、例の三人の話はしなくてよかったの？」

大部屋からぞろぞろと出ていくみんなを見ながら、今回のミッションの資料を整理していた僕に美琴は小さな声で聞いてきた。

「ああ……結局まだ彼女達が何者なのか分かってへんし、‘使徒’の連中やないと思うからこのことは少人数で解決しようと思てな一応そのメンバーとして庄太郎と俊美にはこのことを話しといたから」

「相変わらず仕事早いね。部隊長の座でも狙っているのかな、うちの隊長さんは」

「んなわけあるかいな。あんなキツツイ仕事、綾瀬川あやせがわ 春菜はるなやないとムリムリ」

「春菜ちゃん的能力は‘分身’だからね。確かにあれだけの報告書に対処するのは、人一人では出来ないからなあ」

‘能力’というのは、この化学世界で生まれた魔術師の才能をもった者が個々として持っている魔術とは違う‘特殊能力’のことである。

ちなみに何故そんなモノを兼ね備えて生まれてくるのかは、未だ分かっていない。

「ふあゝつ。とにかく、その事で何か分かったら真っ先に私に教えなさいよね。私も気になっているのだから」

「はいはい、分かりましたよ美琴さん」

欠伸をしてから話す美琴に、僕は呆れながらもそう答えた。

§

§

自分の部屋の中でパニック状態に陥っていると、突然聞いたことがあるようなないやうな女性の声が聞こえた。

「おはようございます、主」
マスター

「えっ、何、誰かいるの！！？」

「右腕ですよ、右腕」

俺はその声に従って自分の右腕を見た。

少し横に厚みのある真っ白なリストバンドみたいな腕輪に、今の俺と同じ青色の宝石が埋め込まれていた。

最初から着けていたようだが、身に着けていないような軽さから気付かなかっただけらしい。

「えーと・・・今の声は、あんた？」

俺は左手でその腕輪を指差しながら言った。

「はい。私は‘天使サポート用’の‘インテリジェント・ハーツ’です」

本当に話しているかのように、青色の宝石がチカチカと点滅している。

内容はさっぱり分からないが・・・

「えっと・・・あんたが何か、まだよく分からないんだけど」「分かりました。順を追って説明しますね」

俺は話が長くなりそうなのでその場に座り、俺が短剣に刺されて倒れてからの出来事や、魔術についての様々なことを聞いた。

「む・・・分かった。それで俺は生きているってわけだ」「はい」

まあ、生きていることはありがたいことだが・・・

「で・・・何で俺は女になっているんだ？」「仕様です」

・・・ふざけているのかコノヤロウ。

「テメエ・・・何か言ったか」

脅すように言ったつもりだったが、俺の今の高く透き通るような声では迫力に欠けた。

「すみません。でもこの方法でしか、あなたを助けることは出来ませんでした」

「どうということだ？」

「詳しい説明を要求する」

「了解しました、主^{マスター}」

「彼女（‘インテリジェント・ハーツ’）は一呼吸おいて（いるように見えた）から話し始めた。

「先ほどの話の通り、自然エネルギーの一つに‘マナ’という魔術を使う際に必要とするエネルギーがあります。そして、重傷を負った主^{マスター}に回復魔術を実行しようとしたが、主^{マスター}の体は対魔力構造を体内にもっていたため、回復魔術が効きませんでした」

俺はそこまで聞き、ある矛盾点に気付いた。

「ちょっと待て。それじゃあ、俺には魔術が効かないってこと？それじゃあ、何故俺はその魔術で重傷を負ったんだ？」

「主^{マスター}が受けた魔術は直接的な魔術ではなく、間接的な魔術であったためです。つまり、その攻撃自体に魔術がかかっているのではなく、存在する武器を魔術で地面を通過させた^{マスター}だけなので、主^{マスター}が受けた攻撃は魔術による物ではないのです」

なるほど・・・

「そのため、回復魔術が使用不可能と判断し、緊急措置として肉体の‘再構成’を行いました」

「‘再構成’？」

「はい。主の肉体を媒体とし、魂の波長から生体パターンを検出、私の中にある‘再構成’のプログラムによって、今の主の体を作りだしたのです」

つまり、遺伝子構造的なものを読み取って、それによって形成される肉体を再構成したということ・・・か？

有り得なさすぎて信じられないが、実際に今俺があの子として存在している以上、事実として受け入れなければならない。

だが、何故俺がこの姿なのかは解決していない。

「ただ、主の今の姿は仮の姿です」

「かりのすがた」？」

「今の主は本来の年齢より若い、マナが体に順応する時期の姿です。何故そうしなければならなかったのか・・・それは主の今まで停止状態にあった魔力炉は膨大なマナを生み出すことが出来るからで、マナに順応していない主の歳の体では負荷が大きすぎて、最悪の場合死にいたる恐れがあったからです」

「そ・・・そうなのか？」

背に腹は変えられないとはまさにこのことだ。死ぬよりかはマシなことか。

「しかし、その点については問題ありません。体がマナに順応するには5日間ぐらいかかりますが、マナが安定すれば自然に元に戻ります」

「ほ・・・本当か!？」

「はい、しかし・・・」

「これ以上言わなくても分かるぜ。用は少し時間がかかるが何とかなるって事か」

「はい、その通りです」

よし、5日間の我慢ってことか・・・
まあなんとかなるだろ。

「そういえば、あんた名前とかないのか」
マスター
「はい。主につけてもらえれば光荣です」

よくあるパターンだな。
そうだな・・・

あ、そういえば、あの少女に‘アリア’って名前をつけてくれて
言われたっけ。

何かあいつの思い通りに事が進んでいるようで癪にさわるが・・・

「‘アリア’・・・なんてどうだ？」

「‘アリア’。起動コード確認」

え、‘起動コード’？突然なんだ？

「‘人格データ’を起動します」

すると目の前に魔法陣が現れ、いきなり背の高い金髪の美女が現れた。

そして・・・抱きつかれた。

「お嬢さまお～～！！会いたかったです～～っ！！」

流れるような金髪をバサバサ揺らし、俺の胸元に頭をこすりつける

彼女。

「ふわっ！だ、誰だよあんなっ！」

気が動転して変な声だしちまったじゃねえか。

取りあえず、抱き付いている手を放してくれませんか。

「アリア'ですよ、ア・リ・ア」

「って、あんた、インテリジェント・ハーツ'なのか！？」

埋めていた顔を上げ、につこりと笑う「アリア'」。

思わずその笑顔にドキツとしてしまった。

って、いかんいかん。

「はい、お嬢様。私は『《天使》補助プログラム』の『アリア'』です。実は過去の主が私を『アリア'』と名付けてくださった時の人格データ^{マスター}を元に、私は構成されているのです」

「は、はあ・・・」

つまりあれか。その人格データによって俺の呼び方が『主^{マスター}』から『お嬢様』に変わったってことか。まあ今の俺の姿なら『お嬢様』で間違っではないが。

「そういうことですよ、お嬢様」

心を読んだ！？

「お嬢様の思考は私と繋がっていますから」
なるほど。

「えっと・・・それで、‘アリア’が実体化している理由は？」
「もちろん、お嬢様をサポートするためですよ。それに、大事なことを忘れていませんか？」

？

「明日から学校じゃないですか」

「ん？ああそうだな」

「その姿で行くのですか」

・・・

「あーっ！っ！！俺って今、完全に別人じゃん！！？」

そうだ！こんな小学生みたいな、しかも女の姿で学校へ行っただけ追い出されるだけじゃん！？

「そのために私が居るんじゃないですか」

自信満々にそこそこ豊満な胸をドンツと叩く。

「お嬢様、頭の中で過去の自分の姿を想像イメージしてください」

‘過去の’って・・・

まあつまりは男の芹沢直人を頭の中で想像しろってことか。

俺は目を閉じて男の時の自分の姿を想像した。

「いいですよ、目を開けて見てください」

ん？今、‘俺’の声が聞こえたような・・・

目を開けると、そこには‘俺’がいた。

t o b e c o n t i n u e d . . .

第二章 #7【異なる自分】（後書き）

（あとがき劇場）（第六回）

正宏「今回から直人の替わりに登場するある人物を紹介するで！

その人物とは・・・」

アリア「才色兼備のアリアさんです！！」

直人「なっ！？ちよつと待て正宏！俺、降板！！？」

正宏「ウソやウソや。今日からアリアさんも一緒にこのコーナーに参加してもらっただけやから」

直人「そ、そうか・・・（ちよつと焦ったぜ・・・この作者、何するか分からないからな）」

氷雨「何か言ったかな、直人君」

直人「いえいえいえ！！何でもありません！！」

アリア「あはははは！焦る主（^{マスター}）ここでは直人は男のままなので呼び方も主のま（^{マスター}）まも可愛い」

直人「んなっ！？アリア、変なこと言うなよ！！てか、才色兼備じゃねえだろ絶対！！」

正宏「なんか僕だけ置いてけぼり食ってるような気がする・・・」

第二章 #8【アリアの暴走】（前書き）

最近ネタ探しに明け暮れている氷雨です・・・
しかし、こんなところで負けられません！！（まだ二章だし・・・）
更新が遅れがちになってますが、ご了承ください。
では、本編をどうぞ

第二章 #8【アリアの暴走】

#8【アリアの暴走】

「な・・・」

俺は目の前にいる「俺」の姿を見て、呆然としていた。服装は今日の俺の服装だった。

「私です。アリアですよ」

そう語る「俺」。

え・・・そうなのか？

「はい。私は魔術で構成され実体化した存在ですから、どんな姿でもとれるのですよ」

ドッペルゲンガーかと思ったぜ・・・

あ、でも今の俺の姿は「俺」ではないから関係ないか。

「そうです。もう一人の自分を見たらお嬢様が死ぬとか、そういうことはないですよ。心配性ですね、お嬢様」

俺って心配性なのか？というか、

「「俺」の声で私とかお嬢様とか言うな。まるで俺が執事にでもなったようじゃないか」

「お嬢様、お呼びでしょうか」

そう言ったアリアは右腕を前に出し、お辞儀した。

「執事するな!!」

「てへっ」

「俺」の姿で可愛子ぶるな!!」

コツンと頭を叩いて可愛子ぶる「俺」の姿に、恐怖を感じた。

こいつを悪乗りさせたらエライことになりそうだな・・・

今のままのアリアに俺の役をさせるのはマズい。

とりあえず俺のアイデンティティが崩壊する前に（既に亀裂が入っているが）、俺はアリアに「俺」の姿を止めさせた。

「ぶーっ。面白かったのに」

こいつ、性格悪いな・・・

というか、精神年齢低くないか。

まあそれでも主である俺の命令には逆らえないらしい。
マスター
それが唯一の救いだ。

「まあ、アリアにまかせれば、この5日間は何とかなりそうだな」

「?・・・よくわかりませんが、お嬢様のサポートはおまかせくださいね」

ま、今日中に「俺」の普段の口調などをアリアに教え込まなければ・
・

「あ、その点は大丈夫ですよ。私はお嬢様と思考や意識を共有する方法があるので」

「『意識』も？初耳だし、それってどういうことが出来るんだ？」

「はい。では実際にやってみましょう。片目を瞑ってみてください」
「お、おう」

アリアの言われたとおり左目を閉じてみた。すると、目を閉じたはずなのにそこには別の風景が映っていた。

「こ、これは」

「はい。今、私が見ている左目の風景です」

すごく変な感じ・・・

だって右目はアリア、左目はアリアを見ている俺が映っているのだ。左右の目が別々の風景を移しているなんて、こんなことは普通ありえないからな。

「分かりましたか」というアリアの声と同時に左目の別風景はフツと見えなくなつた。

「つまり、私の五感をお嬢様は共有出来るのです」

「そういえば、俺が気を失っている間も、これと同じ原理を使つたのか」

確か、それで気絶状態の俺の体を動かすことが出来たのか。

「いいえ、あれは『ユニゾン』と呼ばれる、互いの意識を“完全に共有させる高度な術です。というのも互いに絶対的な信頼がなければ使用できませんから。というよりもあの時、あの状況で『ユニゾン』を起動出来たのが不思議なのですが・・・」

「え？アリアが自分から‘ユニゾン’を起動したんじゃないのか」
「はい。確かに緊急措置として‘ユニゾン’を起動しましたが、それが出来たのは気絶状態であるにもかかわらず、‘ユニゾン’が可能な状態にあったからです」

つまり、始めから俺は無意識のうちにアリアに絶対的な信頼を寄せ
ていたというのだろうか？

もちろん、今は俺の命を助けてくれた彼女を信頼しているが、あの
時は意識がなかったはず。

自分で自分が分からなくなった・・・

・・・まあ、とにかくだ。

「そのことは俺にも分からないから今はいいとして、つまり学校へ
行っている間、‘俺’の姿になっているアリアと意識を共有して動
けば、問題ないというわけだな」

「はい。ただし、五体感覚を共有させている間、お嬢様は動くこと
が出来ません」

つまり、無防備になるってわけね。

「まあ、授業中とかはボロが出ないと思うし、オレをよく知ってい
る奴らの前だけでいいかも。後は適当に行動してくれば問題ない
よ」

「分かりました。あ、あとそれについてもう一つ・・・」

・・・なるほど。

俺はもう一つ問題が増えたことに、溜め息を溜め息を吐いた。

§

§

「さて・・・まさかこんな近くにいたとはね」

私達が探し求めていた人物。それはついさっきまで側にいた、白銀の髪の少女のこと。

アパートの前でリーザを待っていた私は、溜め息を吐きつつ、実は探していた人物が目と鼻の先にある道場のある家に住んでいたという事実を、私はまだ信じられないでいた。というか信じたくなかった。

あれだけ苦労したのに・・・

「支度できました」

そう言つて部屋からポニーテールを揺らしながら急いで出て来たりリーザを見て、まあ、彼女が無事だったからいいか、という気持ちになった。

結局、私達は彼女の部屋から出たところで転移魔法を使った。

まあ転移先は部屋から見えた玄関先の、丁度いろいろな物で身を隠せそうな一角を見つけ、そこに転移しただけだが。

そして外に出ると見覚えのある通りだな～と思って歩いて3分、驚いたことに私達が滞在しているアパートの前に着いていたのだ。

それから数分後、いきなりあの『インテリジェント・ハーツ』の彼女からの思念通話があり、「主が目を覚まされたら連絡します」と言うので、私達は戦闘で汚れたり破れたりしている服を着替えたりとにかく戦闘での疲れをとるために仮眠を取ったりした。

そしてついさつき再び呼び出されたのだ。

少し口調が違ったのが気になったが。

「それじゃあ、行きましょうか」

「はい」

私達はそう言って、再び彼女に会うためアパートを出た。

§

§

「えっと・・・つまり、俺が守ろうとした2人の女の子がまた家に来ると」

「はい、その通りです」

「何よりもそれを先に言えっ！っ！」

ただでさえ問題が山積みなのに、これ以上俺にどうしろと！？

まあ幸い、じいちゃんやんは町内会とやらで家を出ていて、夜まで帰ってこないし、今は家に誰もいないが。

「なるようになりますよ」

「そんなこと言っているのはこの口か、あん」

「いはいれふっひっはらはいへふははいっ」

「うつ！！！」

楽観的なアリアに苛立った俺は、彼女に近付いて彼女の顔に手が届くように背伸びしながら彼女の頬を両手で軽く引っ張った。人間に近い存在として実体化しているためか、頬を引っ張られる痛さは感じるらしい。

だが、両手をブンブン縦に振る彼女の仕草を見て、可愛さのあまりすぐに手を離してしまった。

いやはや、なんて攻撃だ・・・

「ま、まあ、こんなことしている場合じゃないし」

アリアから視線を外し、恥ずかしそうに頬を掻いていると、

「お嬢様、可愛いっ！！！」

ムギユツ

また抱きつかれた。

顔をアリアの胸に押しつけられて苦しい・・・

「（モゴモゴ）はっなっせっ！！！」

「いやです」

あれ・・・？放してくれない！主^{マスター}の命令は絶対じゃないのか！？

「はっなっせっ！！」は“放して欲しくない”の意味ですよね
「？」

どこの辞書だそれは！？

「自伝です」

誰かこいつを止めてくれっ！

ガチャッ

あっ

「ど、どなた？」

そう言って部屋に入って来たのは赤髪、灼眼の女の子と黒髪、黒い瞳の女の子だった。

「『インテリジェント・ハーツ』の『アリア』です」

アホな感じで答えるアリア。

「えっつと、芹沢直人です」

ようやくアリアの腕から解放され、俺も自己紹介した。

「ナオト・・・やっぱりあなた、ナオトだったのね」

そういえば、赤髪の方の彼女は男の時の俺を知っているんだっけ。と思ったら、いきなり頭を下げられた。

「本当にごめんなさいっ！！」

いや、いきなり謝られても・・・

後ろの彼女もオロオロしてるし・・・

「と、とにかく、頭を上げてくれないか？」

「いいえっ！私があなを巻き込んでしまったせいで・・・」

「いやいや、あれは俺が勝手にやったことだし」

少しだけ顔を上げてこちらを見るフィレス。

そんな目をつるつるさせてこっちを見つめないでくださいっ！

「え〜と、フィレス様？どういうことで？」

後ろの彼女はどうか状況把握していないようだ。

「まあとにかく、話をしましょう」

とりあえず状況を把握していない黒髪の彼女のためにも、俺は覚えている範囲で話をし、彼女達も自己紹介や何者なのかも話してもらった。

「私からお礼を言わせてくださいっ！！フィレス様や私を助けてくださってありがとうございますっ！！」

話を聞いて、リーザもようやく状況を理解したようだ。

「いや、困っている人を助けるのが俺のポリシーだし」

「結果的には私がんばったんですけどね〜」

アリア、お前は黙ってる。

アリアは俺の心を読みとったのか、シユンとしていた。

「とにかく、つまりフィレスさん達は俺を探しにこの世界とは異なる世界から来たと」

赤髪の少女の名はフィレス、黒髪の少女の名はリーザであることを教えてもらった俺は、とりあえず元の‘俺’より年上（一つ上なだけけど）だそうなので、俺はさん付けで呼ぶことにした。

今はフィレスも落ち着いて、話しをするために丸机と座布団を出し、台所からお茶やお菓子を失敬してきた。

てか、アリアは遠慮しろよ・・・さつきから煎餅をボリボリ食い散らかしているの、お前だけだぞ。

「私の仕様です」、うるせえ。

「はい。それで、私は・・・いえ、私達はあなたの力を借りたいのです」

「力？力なんか持って無いけど」

剣についてはそこその実力はあるが、それでもこの体になってから抱きつくアリアを振り切ることさえ出来なくなっている程、非力な体である。

つまり今はその剣さえ奮えない・・・

「見事に‘使徒’を退いたのではないですか」

そう言うがな、リーザ。

「いや、だからあれはアリアの力だ。今の俺には・・・」

「お嬢様は魔術を使えるではありませんか」

??

突然喋り出すと思ったら訳の分からんことを・・・

「魔術？そりゃあ今の俺には魔力は在るのは知っているけど、魔術ってのは個々の術について学ばなければならんだろ？そんなの、初心者俺に魔術なんか」

「では『捕縛魔術』を使ってみてください」

なっ、アリアは何を・・・

「私の言葉を繰り返してください、『鎖状捕縛』」

その『言葉』を聞いた瞬間、いつの間にか頭の中にあつた『鎖状捕縛』についての魔術が引き出され、自然と起動する体勢に入った。

「『鎖状捕縛』」

「きゃっ！！？」

「えっ！！？」

自然と口から出た『言葉』と同時に、目の前に座っていたアリア、リーザの体は、床から現れた無数の鎖によって拘束された。しかも、なんかエロい縛り方で。

「ちょ・・・ふあっ・・・はなし・・・ひゃんっ」

「とけ・・・んんっ」

「なっ！？／＼／」

「成功ですね！ぐふふふふっ」

何だこの空間は！！？

フィレスやリーザが頬を赤く染めて甘美な声を上げているっ！

その原因は、本来の‘鎖状捕縛’ではなく、鎖が生き物のようにうねうね動いていることだろう。

これは、俺の魔術にさらに何かの魔術がかかっているな！！
そうなると犯人は・・・

「アリア、お前の仕業か！！？」

「さて、なんのことでしょう？」

「答えなさいっ！！！」

「はい、私の仕業です　はっ！！バラしてしまいましたあ！」

「いいから、早く止める方法を教える！！！」

「‘消えろ’って念じれば消えますよ」

そんな簡単なのか？ええい、今はそれどころでは！！早くしないと俺の理性がっ！！

俺は目を閉じて、鎖を消すことに意識を集中した。

「（消えろっ！！）」

ポンっという音共に、鎖は簡単に消えていた。
二人は荒い呼吸でその場にうずくまっていた。

「ぶっっ。なかなか良かったのにっっ」

こいつ・・・絶対、中身は変態オヤジだっ！！

「きつ、貴様あっ！！フィレス様にな、なんて事を！！！」

リーザ、キミは何で腰に短剣ぶら下げて、しかも抜こうとしているの
っっ！！！！？

いや、気持ちはわかるけど。

ああ・・・自分が非日常に巻き込まれていくのが目に見えて、涙が出てきた。ついでに情けない声も出てしまった。

「ご、ごめんなさい・・・」

「！！？／／・・・こ、今回はゆ、許しましょう」
「？」

なぜかわからないが、リーザは顔を赤くして目をそらした。
まあ、助かったのだろう。

「フィレスさん、大丈夫ですか？」

「あつ、はい、大丈夫です」

フィレスもまだ頬を染めながらも、なんとか復活してくれたようだ。
俺は安堵の溜め息を吐いた。

「それでとりあえず、何故俺の頭の中に魔術の知識があるのか教えてくれないか、アリア？」

「睡眠学習です お嬢様が眠っている間に基本的な魔術の情報を、脳に直接送ったのですよ。といっても、量は少ないので安心してください」

「なるほど・・・」

ふむ・・・まあ、それはいいとして（よくないが）、

「アリア、他の魔術を試せばよかったんじゃないかな？」

俺は笑顔をひきつらせてそう聞く。
そして彼女から出てきた言葉は予想通り・・・

「面白そうだったからです」

「ア〜リ〜ア〜」

「はい、何でしょうお嬢様？」

「お仕置きです　フィレスさん、リーザさん。彼女を押さえつけてください」

「はいっ!!」

「勿論です!!」

ガシツと両肩を掴まれ、体を固定されるアリア。

「えっと・・・お、お嬢様、何を？」

スツとアリアのこめかみに握り拳を持っていき・・・

グリグリグリ〜ッ!!!!

「イタタタタッ!!!! いたいっ! いたいです〜っ!!!!」

そしてアリアの悲鳴は長い間、部屋から響いていた。

t o b e c o n t i n u e d . . .

第二章 #8【アリアの暴走】（後書き）

（あとがき劇場）（第七回）

正宏「今回ボクの出番ないっ!!」

直人「Hahaha! そんな時もありますよ、正宏君。ま、俺は主人公だからフル出場だろうけどな!!」

アリア「でも、油断していると『グサリ』ですよ」

直人「うわあ! なんかそれデジャヴ!!」

アリア「ま、消されないように頑張りなさい、^{マスター}主よ」

正宏「ま、男の『直人』としてはもう消えてるけどな」

直人「えっ! もう『俺』の出番無し!!?」

第二章 #9【心の在処】（前書き）

今回は少し心温まる話です。

第二章 #9【心の在処】

#9【心の在処^{ありか}】

「イタタタタ・・・まだ頭がジンジンするです」

こめかみを押さえ、うずくまるアリア。
自業自得だつての。

「そういえば、アリアは『インテリジェント・ハーツ』なのだから、物理的な攻撃は効かないんじゃないの？」

と質問するフィレス。

「^{マスター}主のみ物理的な攻撃が出来る」という仕様なのです・・・ぐすん」

お前にとっては、悪い仕様だったな。

「これに懲りてアホな行動をとるな、分かったか？」
「分かりましたあ・・・」

彼女の主（マスター）として、俺が舵取りをしなきゃならないからな。

ま、とにかくだ。

「話を戻すけど、確かに魔術は使えるかもしれないが、今の俺では強力な魔術は使えないと思う。とりあえず、あと五日待ってくれ」

俺が‘仮の姿’であることなどをすでに話して知っているフィレスとリーザは、こくんと頷いた。

俺だってそれなりの覚悟が必要だ。なにせ、俺の力を必要としているのは分かるが、何故必要なかはフィレスにもリーザにも知らされていないらしい。

最初は嘘だと思って聞いていたが、彼女達の真剣な表情を見てこれは本当のことなんだと悟った。

もしその魔法世界に行ったらとしても、いつ帰れるか分からないし、帰れないかもしれない。家族には話をつけなければならない。今のこの姿のことも・・・

本当に俺は5日間で決断出来るのだろうか・・・

「お嬢様なら大丈夫です。私もいます。自信を持ってください」

俺の気持ちを察してか、アリアはまだ頭をさすりながらも、笑顔でそう言ってくれた。

「そうだな。なるようになるか」

俺は笑顔でそう言うと、すでにアリアから手を離し座布団に座って対面の位置にいるフィレスとリーザの方に向き直った。

何故かまた頬を赤くしているが。

「それで、フィレスさんリーザさんはそれまでどうしますか」

「あ、えっと、とりあえずあの時に現れた少年、少女が何故‘使徒’について知っているか気になるので、私達は別行動をとらせてもらいます」

「しかしフィレス様、あの者達が危険因子かもしれません」

「リーザ、おそらくそれは無いと思うわ。‘使徒’と対抗しているという話が嘘だとしても、‘使徒’の二人組を助けようともせず見ていただけらしいから、‘使徒’ではないだろうし」

実際、俺はその姿を見たわけではないが、彼女等を狙っていた‘使徒’のことは知っているとすることは、要注意人物だな。

「まあ、それに関しては俺も手伝うよ。俺の方がこちらの地理に詳しいし。出来ることがあれば協力するよ」

「ありがとうございます」

そういえば、フィレスやリーザは俺に敬語を使っていることに気付いた。

「いやいや、お礼される程のことじゃないし、敬語とかはいらないから」

「なら、私達にも他人行儀に‘さん’を着けないでもらえるかな」

「いや、それは年上‘もらえるかな?’・・・はい。」

‘年上’という言葉に笑顔をひきつらせる二人を見て、俺はすぐに了承した。

女の子には歳はNGワードだったな・・・

「それなら、俺も‘直人’でいいよ」

「それじゃあ、ナ「ダメですよ!!」・・・?」

突然、アリアが口を挟んできた。

「お嬢様は女の子なのですから、可愛い名前がいいです!」

また訳の分からんことを・・・

「お嬢様、私はお嬢様の名前に『奈緒^{なお}』を提案します」

また捻りのない名前だしっ！！

俺の『なおと』の『と』を取っただけじゃん！

だが結局、フィレスやリーザが「可愛い」とかい出して俺の抗議も虚しく、俺の名前は『奈緒』になった。

そして、話し込んでいたこともあって日はすでに落ち、辺りも真っ暗になっていたので、今日の所は解散することになった。

とりあえず、俺は学校の始業式があると二人に告げ、午後からまたここに来てもらうことにした。ついでにその時、アリアから念話について教えてもらい、何かあればそれで伝えることになった。

「じゃあナオちゃん、また」

「ではナオ殿、また明日」

「はい、また明日です」

「おう、また明日な」

そう言っで部屋を出て行く二人。

女の子二人をこんな暗い中を歩かせるのは、と思ったが、今の俺の姿の方が危ないし、リーザがいるから大丈夫とフィレスに断られた。

フィレスに“奈緒ちゃん”、リーザに“奈緒殿”・・・
なんか気が滅入る・・・

二人が出て行った後、何故かアリアはメガネを出してかけていた。まるで教師みたいな出で立ちだ。

「さて、お嬢様？」

「何だよ、ア」

「“何だよ”ではありません。もっと女の子らしい話し方をしてください」

「はあ！？」

またいきなり何を言い出すかと思ったら・・・

「俺は男だ！」

「今は女の子では？」

「だから、お」

サッ

スパーンッ！！

「んっ！！？」

痛快な音が部屋中に響いた。

「イタタタ・・・」

俺はあまりの痛さに耳を押さえた。

音の割には叩かれた痛くなかったが、その大きな音で耳が痛くなったのだ。

「お嬢様。また男口調になっております」

アリアのその右手には、キラリと光るあるモノが握られていた。
それは……

古代兵器、‘ハリセン’、出はないか！！？いや、古代兵器ではないが……

「ちょ、アリア……なんでそんなモノを……」
「もちろん、お嬢様の教育用にです」

ハリセンという名の武器を片手にニコツと笑うアリア。
いやマジ怖いから……

「お嬢様、もし外を出歩いたときにお嬢様のような可愛らしい少女が男口調で話していたら、どう思われますか？」
「それはそれで、オレっ子みたいで……」

スパーンッ！！

「いひゃいつ！！」

「変な子ですよ、へ・ん・な・こ！」

「うっっ。分かったよ、やればいいんだろやれ……」

再び振り下ろされようとするハリセン。

「……分かったよ。女口調で喋るよう気をつけるから、これ以上叩かないでよね！ふんっ！……これでいいの？」

・・・ツンデレ口調が入ったような気がするが、気のせいだ。

パサッ・・・

すると、突然俯いてハリセンを取り落とし、肩を震わせるアリア。
あ、何かまずかったか？

「どうしたの、アリア？私、何か不味いこと言ったかな？」

「か・・・」

「か？」

「可愛いですっっっ！！！！」

ムギユツ

「ふにやつー！！」

反射的にアリアの抱きつきを回避しようとしたが、遅かったようだ。
・・・変な声まで出してしまったし。
また顔をアリアの胸に押しつけられて苦しい・・・

「（モゴモゴ）はななせっ！！」

「いやです “放して欲しくない” の意味ですよね？」

ああ・・・これは、‘無限ループ’だ・・・

結局、俺は抵抗できずに窒息寸前まで抱きしめられていた。
トホホ・・・

§

§

とりあえず、彼・・・いや、彼女に協力を仰ぐことは出来た。
あとは・・・

無言のまま、私達はアパートについた。
そして、

「ごめんなさい、リーザ！」

部屋に入り戸を閉めると、私はようやく謝る決心をして彼女に謝った。

「えっ？ いや、顔を上げてくださいフィレス様！」

「いいえ！ 私は避けられたはずなのに、あなたを危険な目に遭わせてしまった。そして、あなたを・・・し、死なせてしまいそうだった！ わ、私は・・・」

「もういいですよ、フィー」

泣き崩れる私に、リーザは昔の呼び方で私を呼び、両手で体を支えて抱きしめてくれた。

「私はフィーを護るためにここにいるのだから・・・もっと、私を頼ってくださいね」

その言葉に私は、はっ、とした。

私は彼女が昔のように親しい名で呼んでくれなくって、怖かったのだと。

私が一番の信頼感を持っていた彼女が、何処か遠くへ行ってしまったのではないかと。

魔法世界にも学校、魔法学園がある。

そこに通っていた頃から、私はいつも孤独だった。

成績優秀、魔術に関してもトップクラスで、荒れ狂う紅蓮の炎の異名を持たされ、魔術に長けた大人にも引けを取らない何者をも寄せつけない強さを持っていた。

大人達には誉められていたが、同世代の同じ学園の子供達は異名を恐れて近づこうとせず、学園での私は浮いた存在だった。

私はあの頃から孤独だった・・・

ふと思い出すのは幼き頃に、共に遊んだリーザのこと。

彼女となら友達として、いや、一番の親友として分かり合えるだろう。

私はずっとリーザに会いたかった・・・

父上が音沙汰なかったリーザが、ローウェント家の近衛騎士団に入団していると聞き、私は彼女と交わした約束を思い出した。

「フィーは私が守るっ！！」

私は嬉しくて仕方がなかった。

父上も、今まで元気がなかった私が喜ぶ姿を見て、今回の任務の護衛にリーザを当ててくださったのだ。

だが・・・久々に出会ったリーザは私を、‘フィレス様’と呼び、敬語で話しかけてきた。

彼女から感じた疎外感・・・

もちろん、彼女はローウェント家の近衛騎士団に所属していることから、警護対象への礼儀作法に沿っていただけのことであり、彼女は何も悪くない。

それなのに、いつの間にか私は彼女との間に壁を張り、彼女さえも寄せつけないようにしていた。

「ずるいよりーザ・・・こんな時だけ私のことを『フィー』って呼ぶなんて・・・」

でも、今は・・・彼女の発した『フィー』という言葉は、私の心を温めてくれる魔法の言葉だった。

彼女が私のことをそう呼んでくれるだけで、私は彼女に再び心を許せた。

今なら素直に言える・・・

私が彼女に一番に言いたかった言葉。

「・・・おかえり、リーザ」

「ただいま、フィー」

それだけで、私達は分かり合えた。
昔のように。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

第二章 #9【心の在処】（後書き）

（あとがき劇場）（第八回）

直人「ここで、反省会を行いたいと思います」

アリア「反省会？なんのこと？」

直人「・・・アナタのことですよ、アリアさん。何ですか、前回の話は？」

正宏「（直人の奴、敬語になつとる！こりゃあ、本気で怒つとるわ・・・・）」

アリア「あの・・・話を盛り上げようと思って・・・」

直人「“話を盛り上げようと思って”？ふーん・・・へえー・・・」

正宏「お、落ち着け、直人！」

氷雨「私が叱っておきますから、安心してください」

直人＆正宏＆アリア「「チーフ！！！」」

氷雨「アリアさん、反省しなさい。『グッジョブです！！』」（「」）

『は念話』

アリア「えっ・・・あ、はい、すみませんでしたっ！『い、いいんですか？』」

氷雨「だいたい、この話はですね・・・『もちろんです！こういうのがないと、盛り上がりません！これからよろしくお願いしますね、アリアさん！』」

アリア「はい・・・反省しています・・・『あ、ありがとうございまずっ！！』」

直人「・・・なんか説教とは別の話をしている気がする・・・」

正宏「僕もそう思う・・・」

- f i n -

あとがき劇場で雰囲気を壊してしまった氷雨です・・・
でも、めげませんよ！

あつちにふらふら、こつちにふらふらな話の構成であることは改善
できません、ご了承ください

第二章 #10【奈緒の憂鬱】（前書き）

今回は《天使》の正体が明らかになります。

第二章 #10【奈緒の憂鬱】

#10【奈緒の憂鬱】

「抱きつくの、禁止ですっ!!」

私こと芹沢直人、改名「芹沢奈緒」は、もう少しでARIAに抱きしめ殺されるところだった・・・

「そんなあゝ。確かに今回は私が悪かったですゝ、でも禁止は酷いですゝ、ぐすん」
「うっ」

う、上目遣いで、しかも目を潤ませるのは反則だあゝっ！

「分かったわ・・・禁止は撤回します。でも程ほどにし」
「ありがとうございますっ、お嬢様」
「うぐっ」

またまた抱きつかれる私。さっきよりはマシだが・・・
ま、いつか。

女言葉に慣れてしまい、かつARIAにとことん甘い奈緒であった。

§

§

「一体、ナオ殿は何者なのでしょうか・・・」

「そうね・・・あの可愛さは半端ないわね」

「確かに・・・」

私もフィーを不埒な目にあわせられて、奈緒に謝られた時のあの顔・

・

一瞬ときめいてしまったではないか／＼

って、その事ではなく。

「いやいや、そのことではなくて・・・彼女の素性のことです」

私はフィーからあのペンダントが「インテリジェント・ハーツ」（
アリア）であつた事や、その主が奈緒であつたことに驚きを隠せな
かつた。

しかもそれだけではない。

フィーの話によれば、アリアは起動する際、『天使』補助プロゲ
ラム』と言っていたらしい。

私達、魔法世界に住むほとんどの人は、その『天使』の存在を知つ
ている。

今から30年前のこと、自らを「魔王」と名乗る男が魔法世界に現
れ、猛威を奮つた。

魔王に対抗するために、魔法政府は優れた魔術師や剣術師を戦線に
投入。

その結果・、九割の剣術師、八割の魔術師が死亡した。
いや、違う・・・実際は酷かつた。

ーその内の八割の魔術師、剣術師が魔王に寝返ったのだー

魔王が彼等に何を吹き込んだかは定かではないが、その事実政府軍の大敗という結果に終わった。

そして・・・

魔法世界全土が絶望に打ちひしがれていたその時、救世主が魔法世界に現れたのだ

それが・・・《天使》。

彼女が自ら名乗ったわけではないが、白銀の髪に白い翼・・・まさにその姿は《天使》そのものであった。

彼女は魔法世界の‘精霊’の力を借りて魔王を倒したらしい・・・そこまでが文献に残っている話だ。（一部、政府によって隠されている所もあるが。）

そして、フィーはその《天使》の象徴である真っ白な翼を見たという。

しかし、奈緒の話から《天使》という言葉は出てこなかった。

「リーザ、やっぱり奈緒が敢えてあの場でその事について、私達に話すことをしなかっただけなのかな」

「もしくは、アリアが意図的に彼女に話していないのか・・・ですね」

おそらく後者だろう。もし前者なら《天使》がどういう存在なのかを知りたいはず。

魔法世界の住民である私達なら知っているかと踏んで、聞いてくるだろう。アリアが知っていて、既にその事についても話しているならば別だが・・・

そして、奈緒が《天使》だと仮定すれば、恐ろしいことに気づかれる。

私達の任務はある人物、即ち奈緒・・・《天使》を見つけ出して力を借りることであり、それは私達の未来に関わるという話だ。

つまりは・・・

魔王が復活すること

魔王の復活は、魔法世界の崩壊・・・

その答えにたどり着くために用いた時間はそう長くはなかった。特にフィーは私よりも先にその答えにたどり着いたのだろう、一度アパートに帰ってきたとき彼女が終始無言だった原因は、私だけではなかったのだ。

「・・・このことを奈緒殿に伝えますか？」

答えが分かっているながらも、私はフィーにそう聞いた。

「駄目よ・・・正義感の強い彼・・・彼女なら、私達の世界のために戦ってくれるでしょう。でも、それでは彼女への押しつけにしかないわ」

確かに何の関係もなかった私達を助けてくれた彼女なら、そうするだろう。

「しかし、いずれにしても何時かはこの事を彼女に話さなければなりません」

「そうね・・・でもそれは彼女が決断したときの方がいいわ」

「・・・そうですね」

私達が彼女^{かれ}を巻き込んでしまったのだ。

これが運命だと知れば、どれだけ楽だろうか・・・

私達は命の恩人でもある彼女に、最大限のサポートをしようと心に誓った。

§

§

「どつどつ・・・」

女言葉が板についてきた私だったが、今まで色々ありすぎて忘れていた一番の問題を思い出し、心底悩んでいた。

家族にどう説明すればいいのだろうか

今は私のベッドの上に寝そべって本棚にあったマンガを読んでいるアリアも、さすがに今回は「どうにかなりますよ」と軽口を叩かないでいることから、事の重大さが分かっているようだ。

「正直に話してしまえばいいじゃないですか」

・・・分かっていなかったようだ。

こいつを信じた私がバカだったと呆れてしまい、深い溜め息をついた。

「あのですね、アリア。化学世界の住民である私達は、魔術を信じていません。つまり、私が魔術でこのような体になってしまったという事を話しても、信じてもらえないのです」

容姿が全くの別人となっている今の私では、聞き入れてくれる可能性は低い。

どうしたら・・・

グルルル・・・

・・・悩んでいたらお腹が減ってきた。

「お嬢様、おなかが空いたのですか？」

「まあ、うん。えっと、そうね」

曖昧に言葉を返す私。この体になってから何故か感情の起伏が激しく、アリアにおながが鳴る音を聞かれたことが、なんとなく恥ずかしくなったのだ。

そして、アリアは寝そべっていたベッドから降りた。

「さて、台所は何処ですか」

台所？まさか・・・

「あ、アリア？台所で何をするのかな？」

「お嬢様の夕飯を作るに決まっているじゃないですか」

なっ！アリアにそんなスキルがあったとは！！

「ちょっと失礼です」。お嬢様をあらゆる面でサポートするのが、私の使命なのですからね」

「魔術での戦闘だけじゃあ、なかったってこと？」

「もちろんですよ。私が人型をとっている理由の一つです」

なるほど・・・単に‘俺’に化けて遊ぶ為じゃあなかったのか。

「遊んで欲しかったのですか？」

「遠慮します」

遊ばれる身にもなってみろ、寿命が縮むだけだぜまったく・・・

ということ、二人して一階の台所へと向かった。

本当は今日の夕飯は出前をとることにしていた。
というのも、今日はいつも夕飯を作ってくれる「妹」がいないからである。

妹の名は芹沢雪音。ゆきね

私の一つ下で高校一年生。

両親が仕事でいない間、家事全般をやってくれていて、中学生とは思えないほどのしっかり者である。

その雪音はというと、昨日から友達の家泊まり込みで遊びに行っている。向こうで今日の夕飯をご馳走してもらうとのことで、遅くなるらしいが9時ぐらいには帰ってくるはずだ。

ここ数時間で得た色々な情報を整理したり今後についても模索したかった私は、どうやら料理の出来るスキルは本物らしく、「あり合わせで作るので、待っていてください」と言うアリアに台所を任せ居間で横になることにした。

ほんと、頭がパンクしそうだ・・・

アリアが作ってくれた夕飯を美味しく頂いた私は（ちなみにアリアの食事は魔力らしい。私の）、疲れをとるため風呂にはいることにした。

で・・・忘れてたよ。

今の私、女の子だったあゝっ!!？

風呂ってことは、は・・・裸になるって事だよな！いや、いくら幼児体型であつてもお、女の子の裸だぞ！！心は‘直人’だつてのに無理だつて！！

とりあえず、アリアのお誘いを断ってみよう。

「あ、アリア。また明日で」

「ダメです さあ、行きましょう」

そんなことを許すアリアさんではない。強制連行開始っ！

駄目だ・・・力では勝てないよ。

ニコニコしながら暴れる私を引きずっていくアリアさん。

ああ・・・やけに楽しそうだなあ、オイ。

マジどっしょう・・・

§

§

「・・・以上です、父さん」

「ああ、報告ご苦労」

会議を終え、すでに父さんが家に帰っていることを知った僕は急いで帰り、父さんに書斎にて今回の「使徒捕獲作戦」の一部始終を話した。

「すまなかったな、正宏。まさかこのタイミングで「使徒」がこちらに来るとはな・・・」

「遺跡への調査ではしかたないですよ、重要な仕事だし。でも、やはり「使徒」の連中は、今回の遠征を意図的に狙っているのでは？」

「・・・内部に協力者がいると？」

「可能性はあります・・・仲間を疑うのは気が引けますが」

「そうだな・・・万が一のことも考えて行動しなければならぬな。それと・・・」

父は真剣な目つきで言った。

「魔術師の二人組と突然現れたというその少女の件は、おまえに任せていいか」

「はい、父さん。全力で招待をつきとめます」

話が終わり父の書斎を僕は、携帯を取りだし連絡が付かず行方不明になっている直人に再度電話をかける。

ブルルルル　ブルルルル

・・・

「やっぱり、でーへんか」

とりあえず、このことを直人の妹、雪音ちゃんに連絡しておこうか。

「・・・送信つと」

僕は彼女にメールを送ると、廊下にある窓を通して暗闇に輝く月を眺めて溜め息をついた。

「ったく、どこいったんや、あの直人^{バカ}」

§

§

シャカシャカシャカシャカ

「うっう・・・」

「痒いところはありませんか、お嬢様？」

「だ、大丈夫・・・」

ちよ、直視できない・・・

目を閉じたままであることで理性を保とうと考えた私はそれを実行しつつ、アリアに誘導されて風呂場の中についた。

そして、椅子に座らされてアリアに私の長い白銀の髪をゴシゴシと洗われていた。

ザバーン

「ひうつ」

シャンプーを洗い流すアリア。
流すと同時に、頭に重みを感じる。

長い髪の毛が水を吸うとこんなに重たいのか・・・
大変なのね、女の子って。

アリアは私の髪を手際よくアップにする。
そして、私にとって最大の難関が来た。

「お嬢様。それでは体を洗いましょうか」

「は・・・はい」

ギューツ

「!!!?」

理性を保つために絶対に目を開けるものと、私は固く目を瞑っていた。

それがアリアの変な気に触れたらしく、

「お、お嬢様、可愛いです～～!!」

と言われ、

ムギユ

「ふわあっ!!ちょっと、アリア、離れてっ!!」

と抱きつかれてしまった。

ああ、ダメだ・・・状況が悪化の一途を辿っている。

しかも背中に柔らかいものが当たっているし!!

「ぐふふふ　真っ赤になって、可愛いっ」

さらに背中に胸を押しつけてくるアリア。

ダメだ・・・意識が飛びそう・・・

「だ・・・誰か、たす、け・・・て・・・」

頭が上気し、さらに場所が風呂場で湿度が高いこともあって、本当に気を失いそうだった。

何故か昔のことを思い出す。

「ゆき・・・ね・・・」

そして昔のように助けに来てくれると思って、私はそう呟いていた。本当は私が白銀の髪の少女という別人になっているこのタイミングでは、非常に不味いのだが。

ドタドタ

え？

誰かの足音が近づいてくる・・・？

ガラガラ

「はあ・・・はあ・・・お兄ちゃん！いるの！！？って・・・」

息を切らして風呂場のドアを開けたのは、雪音だった。

そして彼女の見た光景は・・・

気絶しかけている少女、そしてその少女を後ろから抱きついている女性。

「どなた・・・ですか？」

私の声が届いてしまったのか、運悪く妹の雪音、登場。

t o b e c o n t i n u e d ?

第二章 #10【奈緒の憂鬱】（後書き）

くあとがき劇場く（第九回）

奈緒「・・・で、なんで私、女の子の姿なの？」

アリア「都合上、こうなりました。それにしても・・・膨れっ面も、可愛いっ」

奈緒「ふわっ!？」

（アリアに抱きつかれる奈緒。）

ちよっ、アリアっ! 正宏も見えてないで助けてよ!!」

正宏「いや、その・・・ムリっ!!」

奈緒「薄情者!っ!!」

氷雨「・・・こうして、またモフモフされる奈緒なのです」

アリア「もふもふ」

奈緒「ふわあっ! ひゃあっ! ちよっ、離してえっ!」

数分後・・・

奈緒「ニャーッ!! シャアアッ!!」

アリア「お、お嬢様、落ち着いて」

正宏「奈緒が猫化して、現実逃避したっ!」

- f i n -

Q：氷雨さん氷雨さん。 どうしてあなたは同じネタを繰り返すの？

A：若輩者だからです・・・orz

第二章 #11【芹沢家の一騒動】（前書き）

今回もネタバレです。

第二章 #11【芹沢家の一騒動】

#11【芹沢家の一騒動】

「あれ、直人兄。家にいるの？」

芹沢直人の妹である私、雪音は、夏休みの最後の日を友達の家で過ごし、夕飯まで頂いてしまい、友達の両親にお礼を述べつつ、急いで家へと向かった。

というのも、直人兄の友達である正宏さんからのメールが、直人兄と連絡が取れないという内容だったので、心配になって早めに帰ることにしたのだ。

・・・すると、玄関の灯りが点いていた。

「あれ？」

もしかして、直人兄は家に帰ってきているの？

私は玄関の戸を開けて、そろそろと中に入ってしまった。
しかし、兄の靴はない。

靴をなくしたのかな？

私は靴を脱いで居間の方へ向かうと、突然音がした。

カタン

「!?!」

それは家の奥からの音で、風呂場からの音だった。

少し怖くなり、私は忍び足で行くことにした。

直人兄は風呂場の中にいるのだろうか・・・

「ゆき・・・ね・・・」

「！！？」

弱々しく私を呼ぶ声が聞こえる。

私は忍び足を止め、急いで風呂場へ向かう。

磨り硝子から灯りが漏れ、人影が見える。

私は直人兄が裸でいるかもしれないことを忘れ、急いで扉を開けた。

ガラガラッ

「はあ・・・はあ・・・お兄ちゃん！いるの！！？って・・・」

あ・・・れ？

そこには直人兄・・・ではなく、白銀の髪の少女と、その少女を後ろから抱きついている女性がいた。

「どなた・・・ですか？」

もしかして、不法侵入者！！？

この状況に呆然としてみると、白銀の髪の少女が目には涙をうつすら浮かべてこっちを見ていた。

か、可愛いつ！！

その可愛い涙目に不覚にもときめいてしまった私は、裸のままここに走ってきた彼女の行動を認知するのが遅れてしまった。

「ゆきねっっ！！」

「ふえっ！？」

突然私に抱きついてくる少女。私は何がなんだか分からずに、服が彼女によって濡れるにも関わらずされるがままだった。

「えっと・・・とりあえず、放してくれるかな」

数秒後、なんとか我に返った私はようやく彼女に話しかけることが出来た。

コクツと頷いた彼女はまだ目に涙を浮かべつつ、風呂場にいる謎の女性から逃げるように私の後ろに隠れた。

何が起きているか分からないが、私はこの少女があのだ謎の女性に脅えているのを見て、謎の女性は敵だと判断した。

「ちょっとそのあなた、誰なんですか！？この子が脅えているではないですか！」

「えっと・・・これはですね」

おろおろしているその女性に、私は睨みつつそう言った。
この人、幼気いたけな少女を泣かすし、私より胸大きいしスタイルよさそうだし・・・やっぱり敵！（最後の方は羨ましさで。）

ズリッ

すると、後ろに隠れていた少女が私の服を握っていた感覚がなくなっていた。

「大丈夫だからね・・・って、ええっ！！？」

なんとその少女は、なぜかその女性を見て石化していた。

カタン

「！！？」

と思ったら、今度はさっきまで風呂場に居たはずの女性が・・・

消えていた（・・・・・・）。

§

§

「・・・あれ・・・？」

目を覚ますと、私は居間にあるソファアの上で寝かされていた。

「あ・・・起きたかな？貴女あなたいきなり倒れたのよ」

だからこんなところで寝かされていたのか。

「あ、この服・・・」

よく見ると、私はワンピースではない服を着せられていた。

「私のお古だけど・・・貴女この服しか持ってなさそうだったから」

そう言って目の前でひらひらさせる私のワンピース。確かに昔、雪音が着ていた服だ。

というか・・・！！

「雪音、帰ってたの！！？」

「え！？う、うん。覚えてないの？」

「え？」

私は顎に手を当て考えた。

そういえば・・・倒れる直前の記憶が曖昧で、はっきりとは覚えてない。

たしか、アリアに風呂場へと連行されて。そして、アリアに風呂場で抱きつかれて。

そして・・・

何があっただけ？

何があつたか思い出せないでいる私は、コクツと頷くしかなかった。

「その話をしたら、貴女が誰か教えてくれるかな」
「！！！」

そういえば・・・今の私、‘直人’じゃないんだつた！
しかたない・・・とりあえず、話を聞かないと。
何か悪いことが起きた気がする・・・

§

§

「えーっ！？雪音に抱きついたって！！？」

「あ、うん」

何故か落ち込む少女。抱きついたのが私だったからかな？
悲しくなってきたよ・・・

そんなことを思っていると、突然、少女が驚きの発言をした。

「ああ、兄として情けないよ・・・」

あれ・・・？

今この子、‘兄’って言った？

泣きそうになっていたことも忘れ、私は彼女に恐る恐る問いかけた。

「兄」って・・・まさか」

ありえないことだけど・・・

「直人兄・・・なの？」

しかし、彼女はそれを肯定するかのようにその言葉にビクツとした。

「え・・・？」

ドウイウコトデスカ？

すると彼女は一度深呼吸をし、決心したかのように話し始めた。

「そう。私は雪音の兄、芹沢直人。何故こうなっているかを今から話すよ」

彼女は今日の摩訶不思議な出来事や「魔術」について話してくれた。

§

§

私の話が長かったにも関わらず、雪音はしっかりと聞いてくれた。さすが私の妹。（シスコンではないですよ。）

「そんなことがあったんだ・・・。大変だったんだね、お姉ちゃん」
「そうなんだよって、お姉ちゃん？」

「だってそうでしょ？今は女の子なんだから」

そういわれればそうかもしれないけど・・・お、お姉ちゃんって。

「駄目・・・かな？」

必殺‘泣き落とし’という感じで目をうるうるさせられれば、断れないではないですか！！

「分かったよ・・・いいよ、お姉ちゃんで」

「お姉ちゃんっ！！」

「わっ！？」

了承した瞬間、今度は雪音に抱きつかれてしまった。抱きつかれやすい傾向があるのだろうか、この体は。

ぐずっ

と、そういうわけではなさそうだ。

「私・・・お姉ちゃんと連絡つかないって正宏さんが言ってたから、心配で、心配で・・・」

「そうか・・・ごめんね、雪音。心配かけて」

私は優しく雪音の頭を撫でてやった。

少しして泣き止んだ雪音の涙を拭いてやり、私はお茶を入れて気を落ち着かせようとした。

少し落ち着いた彼女は、今度はアリアことを聞いてきた。

「じゃあ、あの風呂場にいた女の人が‘アリアさん’というお姉ちゃんをサポートする‘インテリなんか’なの？」

「そう。私もよく分からないけどね」

今はアリアは腕輪の中に戻っているらしい。おそらく私がさっきまで気を失っていたことが関係しているのだろう。

「でも話を聞く限り、アリアさんのあの姿は、お姉ちゃんが考えたってことじゃないの？」

ブーッ

「わっ、お姉ちゃん！お茶飛ばさないでよ」

「そ、そんなわけないでしょ！！勝手に現れたの！」

ジト目で睨んでくる雪音に、私はぶるぶると首を振り否定した。

「まあ、それはないと思ってたけど。でもそれにしてもお姉ちゃん、だいぶ女口調が板についてきてるね。前世は女だったんじゃない？」

「・・・泣いていい？」

この姿になって、感情の起伏が激しくなったような気がする・・・

「ごめんごめん、お姉ちゃん！今の忘れて！」

泣きそうになっている私に顔を赤くして必死に謝る雪音。
まあ、別にいいけど。

「その、アリアさんとお話したいな〜って思ってた」

そういえばアリアの奴、ずっと静かだった。休止状態に入っているのかな。

私は念話で彼女に話しかけた。

『おい、アリア』

『・・・はい』

あれ？何故かアリアが汐らしくしている。

『とりあえず、出てきてよ』

『（ビクッ）お・・・お説教ですか』

・・・なるほど。さっきの風呂場でのことで反省しているのか。

『そうですね・・・正座で2時間ほど聞いてもらいますか』

『ごめんなさい、ごめんなさいっ！〜！』

『・・・嘘よ。ちよっとからかってみただけ』

『え？』

別に怒っているわけではないけど、さっきの騒動の仕返し。

『聞いていた通り、雪音が話をしたいって』

『・・・分かりました』

フツと私の隣に現れるアリア。

「話は聞いていました・・・雪音様、すみませんでした」

コクリと首を下げてそう謝るアリア。そうだぞ、お前が悪いんだからね。

それを見て必死に手を振る雪音。

「いえいえっ！私は少し驚いただけだから気にしないで」

本当に優しい妹だな、雪音は。（繰り返すけど、決してシスコンではないです。）

その後、2人はなんとか打ち解けたようで、楽しくお喋りをしていた。

話の中で、雪音はアリアに風呂場での不埒な行為について、私の代わりに叱ってくれた。

ふーっと息をつく私。

雪音がいてくれればアリアの暴走を抑えられるかもしれない。そう思っていた・・・のだが。

「でも・・・分かります」

え？突然な、何を言っているのかな、雪音？

「だって、あの可愛さは反則なもの!!」
「そうですね、雪音様!」

そう言つて私を凝視してくる2人。

正直、怖いです・・・

そういえば、雪音つて小さくて可愛いものが好きだったっけ・・・
可愛いのは別として、小さいっていうのは合ってるな・・・

怯える私に狼達が襲いかかった。

「お姉ちゃん、可愛いっ!!」
「にやっ!!」

「あ、雪音様ずるいです」
「ふぁっ!!?」

両サイドから抱きつかれてしまった私。
身動きがとれません・・・

「はな～し～て～!!」
「いやだよ」
「いやですよ」
「ね～っ」

・・・意気投合する2人。

前言撤回です。

私の天敵がまた増えました・・・

泣いていいですか・・・？

t o b e c o n t i n u e d ? ?

第二章 #11【芹沢家の一騒動】（後書き）

くあとがき劇場（第十回）く

ゴゴゴゴゴ

奈緒「私は玩具じゃない私は玩具じゃない私は玩具じゃない私は玩具じゃない私は……」

アリア「逃げましょう、雪音様！現実逃避しているお嬢様はキケンですー！」

雪音「でも、正宏さんがー！」

正宏「ぼ、僕は大丈夫やあ……それより、はよ逃げな、お2人さん……ガクッ」

アリア&雪音「貴方のことは、一生忘れま……忘れるかも」

正宏「ひどくない！？僕の扱いー！」

奈緒「シャツー！ー！」

ボスッ

正宏「ぐはっ！なんで僕が……」

ドサッ

アリア&雪音「な〜む〜」

氷雨「奈緒の怒りを一手に引き受け自らの命と引き替えに2人の女を守り、男として人生で一番輝いた正宏だった……チーン」

正宏「し、死んでないわ、ポケエーツ!」

第二章 #12【長い1日の夜】（前書き）

更新が遅れました・・・

第二章 #12【長い1日の夜】

#12【長い1日の夜】

「2人とも！抱きつくの、禁止ですっ！！」

私はなんとか二人の拘束から逃れ、説教モードに移行していた。

「「そんなぐっ！！ぐすん」
「うっ」

う、上目遣いで、しかもダブルで目を潤ませるのは反則だあゝっ！

軽いデジャヴを感じた・・・

そ、そんなものには屈しないぞっ！！

「ま、まあ程々にするならいいよ」

あれ？

「「わーい」
「」

ムギユッ

「ふにゃあーっ！！！？」

私のバカあーっ！！

とにかくいろいろあったが、

私はクロスチョップを発動することで、どうにか事態を収束した。
頭をさする二人には悪いけど、正当防衛だからね、これは。

「お姉ちゃん、強く叩きすぎだよ・・・」

「痛いです・・・」

「はぁ・・・何かどつと疲れたよ」

今の手刀をアリアはともかく、雪音に避けられなかったのが幸をそうしたな。

実は祖父の影響で、雪音も剣道を習っている。こちらは泉流剣術ではないのだが、雪音は反射神経がいいので、私でさえ時々攻撃を避けられることがあるほどだ。

今回は私に抱きついていたら当てれたが、普段なら無理だろうな。
暴走状態に陥ったときの雪音の対策を考えていると、ふと雪音がこう言った。

「と、とりあえず、正宏さんに連絡すれば？」

「そうね。雪音の話だと正宏に大分心配かけちゃったみたいだし」

今、家の電話は壊れているから、携帯電話で・・・

・・・あつ。

そういえば携帯電話は何処どこ!!？

「雪音・・・。携帯電話、戦闘後の記憶ないから・・・なくしたかも」

「なくした!?!?どういうことお姉ちゃん!!?」

妹に怒られ落ち込んでいると、頭の痛みからようやく復帰したアリアが、驚くべき発言をした。

「心配しないでいいですよ。すべて回収して、今は私中にあります」
「そうそう、回収済み・・・って、えーっ!!?」

アリア、私の携帯電話、持ってるの!?

「えっと、どういうことですかアリアさん？」
「説明します。私中には魔術で造られた無限収納スペースがあるのです。先の戦闘後、全てそこに回収しました。ちなみにお嬢様の意思で、取り出したり収納したり出来ます。取り出したい物をイメージすれば、そのみ取り出すことが可能です」
「へえ、アリアさんには、そんな昨日もっているんだ」

エッヘンと胸を反らすアリア。

「それを早く言ってよ!!」

「言うタイミングがなかったんです・・・」

「はあ・・・」

まあ、でも確かにそれは便利だな。夜中の収納で困っている奥様方には大うけしそうだ。

「そういえば、このワンピースはお姉ちゃんの私物じゃないよね？」

と言つて、私達にあの白地のワンピースを見せる雪音。

「そうよね・・・」

目が覚めたら勝手に着ていたし。

「それはおそらく、お嬢様の魔術で造られた服です。イメージによる物質創造ですね」

「“おそらく”って、アリアが造ったんじゃないの？」

「私ではないです。お嬢様の意思で造られた物なのですよ」

そういえば、あの時に会った今の俺にそっくりな少女もこんな格好をしてたっけ。あの娘の仕業かな？

「お姉ちゃん、心当たりがあるの？」

「うん・・・分からないや」

まだ確信はないし、そもそもあの少女は何者だろうか？

「お姉ちゃん、そういえば下着は？」

「え・・・」

「それは可愛い下着を着けていらっしやいましたよ、お嬢様！！」

目をキラキラさせてそう語るアリア。

しかし、顔を真っ赤にしている私はそれどころではない。

お、男が女の子の下着を履いているとか・・・今なら恥ずかしさの

あまりに死ねるのでは？

「あはは・・・三途の川だ・・・」

「お、お姉ちゃん、落ち着いて!!」

「そっちに行つてはなりません、お嬢様!!」

慌てて止めるアリアと雪音。

2人によつてなんとか意識が現実に戻つた私は、まだ取り乱しながらもアリアにその少女の事を聞いたが、知らないということなので、結局分からずじまいだった。

「ま、まあ、とにかく今は携帯電話。えっと、取り出したい物をイメージすればいいんだよね」

話題転換して下着のことを忘れることにした私は、手を前に突きだして目を閉じ、自分の携帯電話をイメージした。

カタッ

目を開けると、手のひらにその携帯電話があつた。

「すごい。手品みたい!」

見た感じは壊れてなさそうだ。

「アリア、変声のサポート、たのむ」

「了解です」

私は電話をかけた状態でアリアに手渡す。

アリアはそれを受け取ると自分の口元にもっていった。

・・・よし。

ツルルル・・・

「はい、木内ですが」

私の耳に入ってくるのはアリアとの部分的なユニゾンによって、アリアが受話器から聞いている正宏の声。

つまり、アリアが聞いているものを私が聞いているということだ。ちなみに、通信先は正宏の家の固定電話だ。

「直人だ」

驚いて目を見開いているのは雪音。

だって、アリアから‘俺’の声が出ているんだもん。

アリアを介さないとこの魔術は使えないらしいが、なかなか使える。

「直人！お前、今何処にいるんや！」

「ごめんごめん。実は携帯電話の電池がなくてさ、今家にいるんだけど少し充電してようやくかけれるようになったんだよ」

まあ、電話が繋がらない状態にあったのは確かだからね。

「それにしても、あの後どないしたんや？」

正宏のいう“あの後”とは、私が正宏に陣内（美琴）が気を失っていることをメールで伝えた後のことだろう。

「いや、あの、実は・・・」

うん・・・魔術とか何やらは言わない方がいいよね。

「爆発音のする方へ向かったはずが、知らない道に出てしまって・

・携帯の電源も切れてしまつて。それで連絡とれなかったんだよ」

「ああ・・・ほんならしゃあないな。自分結構方向音痴やからな」

「ごめんな心配かけて」

「いやいや、無事ならそれでええ」

“無事”つて・・・まあ、俺的には無事ではないのだが。

「そうそう、雪音ちゃんにもメールで連絡つかないって伝えてしもたから、ちゃんと説明しときゃ」

「ああ、雪音はもう家に帰っているぜ。ちゃんと説明したから大丈夫だ」

「さいか。ほなら明日な」

「おう」

ブツツ

電話が切れると、私はアリアとの部分的なユニゾンを解いた。

「はあ・・・うまく誤魔化せたよ」

「まあ、本当の事を話しても・・・ね」

私が疲れたようにそう言つと、雪音も仕方ないよというふうにそう言つた。

「で、今一番の問題は・・・」

時計を見ると、9時を過ぎていた。

「お爺ちゃんだね」

§

§

カチャッ

「はあ・・・やれやれ、一時はどうなるかと思ったよ」

固定電話の受話器を戻し、僕は安堵の溜め息をついた。

直人の無事も確認出来たし、魔術に関わってしまったのではないなら一安心だ。

魔術と関わることは、この平和な日本でさえも死と隣り合わせの生活を送ることとなる。

化学世界に在住している魔術師のほとんどが僕の父、木内 才すけが統括する組織‘旧魔法政府軍’に所属している。

そして、ルーファスⅡヴェリス。それは父がかつて魔法世界にいたとき名前だ。

父から魔術師としての才能を受け継いだ僕は、父から魔術や魔法世界の存在を教えてもらい、さらに彼の生い立ちや特にこの世界へ逃れる切っ掛けとなった‘魔王戦争’についても詳しく聞かされた。

魔術は魔法世界において、必要不可欠な存在となっているが、使い

方を誤れば容易に人を殺めてしまうモノだ。

つまりそれは、時に凶器と成りうるということ。

それ故にさらに強力なちからを求めようとする魔術師も少なくな、魔術を苦手とする剣術師もより強力な武器を必然的に求めるようになる。

そしてそれが戦いを生み、より危険な世界へと足を踏み込むことになるのだ。

親友の直人だけは、この危険な世界に関わって欲しくないと思っている正宏

しかし、そのねがいを欺くかのように直人の時は動き出す・・・

§

§

「雪音、私は爺ちゃんにはこのことを黙っておこうと思っているの」「どうして？」

「単に関わって欲しくないからよ」

私達は居間にて今後の対策案を練っていた。

「私もお嬢様の意見に賛成です。魔術を知ることとは、危険を伴います」

「そう・・・だね。って！私はどうなの！」

「・・・・・・・・」

「アリアさん、目を反らさないでください！」

「雪音には悪いけど、私達と共に行動してもらう必要があるの・・・

それは風呂場での騒ぎの少し前、丁度夕飯を食べ終えた時のこと。私はアリアが台所で何かを調べているような仕草をしているのに気付き、アリアに話し掛けた。

「アリア？なにしてるの。もう食器洗いは終わらせたくない」

「はい・・・お嬢様、お嬢様のご家族もしくはこの家を訪れた人で、魔術師、もしくは魔術を使える方はいらっしゃいましたか？」

え？魔術師？

「あ、アリア？質問の意図が分からないのだけれど」

「この台所で料理をしていたときからですが・・・微少ながら魔力反応があります。つまり、この場所によくいる者は魔術師かもしれない。魔術師の資質があると思われます」

「それって・・・私の家族の中に魔法使いがいるってこと！？」

「おそらく」

台所・・・

・ 一番可能性に上げられるのは、家事全般を任している雪音だけど・・・

「うーん。でもそれって、信憑性あるの？」

「そうですね・・・あらゆる可能性を考えると、およそ80%ですね」

意外と高いよ、それ！！

「そ、そうなんだ・・・」

まあ、この問題は雪音が帰ってからにするか・・・

ということがあったのよ」

「つまり、私も魔術が使えるってこと？」「はい、おそらく」

そして、そこが問題なのである。

「今までの話から推測するに、私達は追われていると仮定していいと思う。そして私の妹が魔術を使えると知られたら、雪音、貴女まで狙われてしまうわ。私は雪音に、魔術に関わって欲しくない・・・」

「しかし成り行き上、雪音様には魔術のことを知られてしまいました・・・」

「私は雪音の意志を尊重するよ」

少しの静寂の後、口を開いたのは雪音だった。

「私、お姉ちゃんの・・・直人兄の力になりたい、私にも魔術を教えて!!」

「雪音・・・」

本当はこんな危ない世界に来て欲しくなかった。でも、それが雪音の答えなら・・・!!

「分かった。よろしく頼むよ!」

§

§

お姉ちゃんについて行く・・・

それが私の答え。

確かにお姉ちゃんの話聞く限り、魔術の世界は恐ろしいと理解できた。

でも私はお姉ちゃんの一姉（兄）妹として、お姉ちゃんの味方でいたい！！

「分かった。よろしく頼むよ！」

そう言つて、手を握ってくれたお姉ちゃん。

その暖かい温もりが、私の決意をより一層固めてくれた。

「・・・あの。二人とも、重大なこと忘れていませんか」

「え・・・・・・・・」

ガラガラガラ

「帰ったぞい」

玄関の戸が開く音と、祖父の声。

あ、お爺ちゃん、帰ってきたんだ。

・・・って！！

隣で固まっているお姉ちゃんに私は祖父に聞こえないように小声で話かけた。

「（お姉ちゃん！！）」

「（あ・・・ああ！！アリア、‘直人’に変身して！私は二階に隠れるから、それからユニゾンする！それまでなんとか誤魔化して！）」

「（は、はいっ！！）」

石化から復活したお姉ちゃんはそうアリアに告げると、猛ダッシュで、しかもなるべく音を立てずに二階へと上がる階段へと走っていく。

お姉ちゃん、早くっ！

「おう、こんなところにいたのか」

「「！！」」

・・・間一髪、祖父が私達のいる居間に入ってくるのと、アリアの変身とお姉ちゃんが階段で二階へと消えて見えなくなった瞬間が重なり、祖父にバレずにすんだ。

「いやあ、隣の植田の婆さんの話が長くての。その話が・・・ん？お主達、何故そこに突っ立っているのじゃ」

「「な、なんでもありません！！」」

ハモる拳動不審な私達の声。

「そ、そうか。ならいいんじゃないが。2人とも、明日から学校じゃろ。早う寝なさい」

そう言うと、祖父は一階の自分の部屋へと入っていった。

「・・・はあ」

私達は安堵のあまり、その場に座り込んでしまった。

「っ・・・雪音、どうにかなったみたいだな。ユニゾンする意味なかったかも」

どうやら今の‘直人’はお姉ちゃんがユニゾンしているらしい。

「そうね・・・あははは、そうかも」

乾いた笑い声を上げる私。

どつと疲れたよ・・・

「・・・雪音」

「なに、お兄ちゃん」

「とりあえず、・・・ありがとな」

「うん！」

直人兄に変身したアリアに頭を撫でられる私。

何だかさっきの疲れが吹き飛んだ気がする。

確かに今は本当の直人兄ではないかもしれないけれど・・・

その暖かみと感謝の気持ちは偽物ではないと、私は思った。

t o b e c o n t i n u e d . . .

#13【ミッション01・入学式その1】（前書き）

半年ぶりの更新です・・・

ども、スミマセンです・・・

#13【ミッション01・入学式その1】

#13【ミッション01・入学式その1】

小鳥の囀^{さえず}る音と共に、意識が覚醒した。

否、実際は五月蠅いセミ鳴き声だった。

「（夢・・・だったのかな）」

横にごろんとなると、白銀ではなく黒い髪が見える。

やっぱり夢か・・・

と思ってみたものの。

長い髪の毛が男の‘俺’のものであるはずがない。

ガバツと起き上がり、机の上の鏡を見る。

・・・そこに映っていたのは。

顔の容姿はほぼ同じだが、目と髪の色が日本人特有の黒^{それ}に変わっていた。

私はその姿に驚愕した。

「な、なんだこれは!!」

確かにこの黒い瞳と黒髪は、この日本で目立たないようにするにはなるが、1日で色が変わるはずが・・・

「あっ・・・」

・・・あったりする。

それは昨日の就寝前の話。

雪音のお古のパジャマを借り、それを着た私は雪音、アリアと共に明日の作戦会議をしていた。
議題は、明日の入学式をどうするか。

「元の姿に戻りまでの一週間、シンクロを使ってアリアに出てもらうわ」

「分かったよ、お姉ちゃん。私もできるだけ協力するよ」

私の通う藤ヶ丘高校は中高一貫の学校で、雪音は藤ヶ丘中学校に通っている。

「よろしく頼むよ。それとも一つ、重要なことがある」

私は一呼吸おいてから話した。

「シンクロの性質上、私はアリアからあまり遠くまで離れられない。距離は学校の敷地内ぐらいかな」

「つまり、私だけでなくお嬢様も学校内にいなくてはなりません」

「えっ、そうなの？」

私とアリアの話に驚く雪音。

「でも、今のお姉ちゃんの姿、結構目立つんじゃない」

特に髪や目の色とか、と続ける雪音。
確かにそうだな・・・

「髪や目の色は魔力を抑えるため、黒色に変わりますから問題ないですよ」

「というത്？」

私はアリアに先を促す。

「今のお嬢様の体内魔力値は本来の十分の一も有りません。それは体内魔力を体に順応させるために私が制限をかけているからです。そしてその魔力値を日々増やしていき、最終的には本来のお嬢様の持つ体内魔力値に耐えられるようになり、元の姿に戻れます」

「十分の一って・・・今敵に襲われたら対処できないってこと？」

「十分の一といっても、高等魔術を使用する魔術師1人分ぐらいに匹敵します」

「・・・」

十分の一で1人分・・・それって、十分チートよね。

「お嬢様、雪音様？大丈夫ですか」

「あ、はい」

「だ、大丈夫よ。でもそれって、私の魔力を抑えることとどう関係あるの？」

まだ答えに到っていない。

「つまり、それだけの魔力を秘めていれば、探知魔術を使われたら敵に居場所を教える様なもの。今の時点では、制限を掛けなくてもいいのですが、明日にもなれば制限を掛けなければいけません」

「それは・・・その制限を掛ければ、髪や目の色が変わってしまうってこと？」

「正確には、髪や目の色を変えることにより、制限を掛けるのです。髪にはその個人の魔力が放出されており、その色は、“火” “水” “土” “風” 個人の秀でている系統の種類を表しています。目の色も然り、です」

系統と髪の色や目の色には関係性があるだって？

「具体例を上げると、フィレス様の赤い髪や灼眼は“火”の系統を示し、彼女の特異な魔術が火の系統であるということを示します。リーザ様の黒髪や黒い瞳は、どの系統も秀でてはいませんが、系統全てを等しく使えます」

因みに“水”は青、“土”はブラウン、“風”は緑です、とアリアは補足する。

「私は碧眼だから“水”の系統が秀でているのは分かるけど、この髪の色は何を表しているの？」

白銀って、何の系統だろうか？

「“光”です」

「“光”？」

「はい。“光”の系統は、四大系統全ての高等魔術を扱うことができ、さらに系統を掛け合わせた上級魔術も扱えます」

「・・・やっぱり、ほとんどチートだね」

魔術について詳しく知らない私でも、その凄さは理解できた。

「なるほど・・・つまり、お姉ちゃんの“光”の系統の力を抑えたら四大系統全ての力が等しく制限されるから、黒髪になるってわけね」

「その通りです、雪音様」

まだよく分かっていない私に、雪音が話をまとめてくれた。

「まあ黒髪や黒い瞳の方が、この日本において一般的だから目立たないからね。一石二鳥だね」

とは言ったもの・・・

私は鏡で黒髪、黒い瞳を確認すると、溜め息をついた。

「起きていきなり容姿が変わってたら、驚くよ・・・」
「すみません、お嬢様。しかし、制限を掛けるのに一番ベストなタイミングがお嬢様の就寝中でしたので」

因みにアリアには腕輪の中に戻ってもらっている。

ま、このほうが目立たないし。
良いとしますか！

「さてと・・・」

私は気持ちを切り替えるため、両頬をパンツと軽く叩いた。

ミッション開始といきますか！！

§

§

「寝坊して少し遅れるから、先に行つといてくれ」ってか。はあ・
・・」

僕は直人からのメールを見て溜め息をついた。

昨日の夜に直人から無事を知らせる電話はあつたが、実際に彼の姿を見たわけではないのでまだ少し心配なのだ。

あんな戦闘を見てしまったからなあ・・・

ある筋でこの地域一体に住む人々の個人情報から、例の白銀の髪の少女について調べたが一致する人物はいなかった。

まあ、あれだけ目立つ容姿ならこの田舎で土地面積の小さい藤ヶ丘町にいれば、一回ぐらい見かけているはずだから当然の結果だ。

その少女が何者なのかは後々考えるとして・・・

僕は藤ヶ丘高校指定の制服を着終え、カバンを持ち玄関に立つ。

「行ってきます」

とりあえずは学校で直人の無事な姿を拝むのが先やな。

腕時計で時間を気にしつつ、僕は急いで学校へと向かった。

家を出て数分後の道中、不思議な子を見かけた。

水色のワンピースを着、大きな麦わら帽子で顔を隠すように手で唾を押さえながら歩く少女。

一瞬昨日の少女かと思いきや、チラッと見たときに見えた髪の色は白銀ではなく日本人特有の黒髪^{それ}だった。

大通りの反対側の歩道を歩いていた彼女は、僕に気付いてか学校の通学路とは違う方向にそそくさと立ち去っていった。

ん、もしかして僕が彼女のことを少しの間、じっと見てたのを彼女に気付いたからかな？

あの少女に変な人と思われたかもしれないと考え、僕はガツクリと肩を落とした。

§

§

「ちょっと、アリア！そういうことは早く言ってよ！！」
「す、すみません。まさかあの時の少年がお嬢様のご友人だったなんて」

さっきたまたま正宏とすれ違ったのだが、どうりで彼の視線を感じたわけだ。

まあ、髪の色の変化で幾分か気付かれないであろう今の私の姿から、正宏が昨日の人物と同一人物であるという答えには達していないだろう。

「しかし、面倒なことになったね・・・」

私は気付かれていないにしても、フィレス達はその姿を見られていることから、迂闊に彼の前で会うことが出来ない。

「ま、とにかく学校に行きますか」

とりあえず今最優先にすることは学校へ行くことなので、彼に会わずにすむ遠回りの道を選び、私は急いで学校へと向かった。

「で、校門に着いたわけだけど」

今、私は校門の近くまで来ているが・・・

「くっ・・・やっぱり、風守^{かざもり} 伊吹^{いぶき}がいるのか・・・」

藤ヶ丘高校二年生、風紀委員、委員長の風守 伊吹。

風紀の乱れは己の名誉に関わると謳い、規律を守らず注意を無視する者には、自前のいつも腰に差している木刀で容赦なく制裁を下すらしい。（しかもその実力は本物だ。）

しかしその凛々しい姿を見た生徒達により、風守様ファンクラブを設立されるほど彼女は人気があるらしい。

でも、私は彼女が苦手だったりする。

とりあえず、正面からは無理だな・・・裏門に回るか。

『アリア、身体能力強化の魔術、今なら使えるよね』

「『はい。だいた体内魔力が安定してきている今なら使えます』」

『オッケー。ならあそこから入れるかも』

アリアと念話で話し終えた私は、麦わら帽子の唾で顔を隠しつつその場を後にした。

§

§

「（ん？あの子は・・・）種島、少しの間この場を頼む」
「了解しやした、風守先輩！」

風紀委員の副委員長の種島^{たねしま} 浩希^{こうき}に校門の仕事を預け、私は先ほど見かけた麦わら帽子を被った女の子を追跡した。

特に怪しく感じたわけではないが、第六感が追いかけるというのだ。その勘が百発百中当たるわけではないが、統計上八割ぐらいの確率

で何かが起こる。

私は彼女に気付かれないように後を追った。

§

§

「よし、ここだな」

学校の裏門に来た私は、目の前にそびえ立つ門を見上げた。

「この姿だと、一層迫力があるね・・・」

3メートルという巨大なこの門には、子供視点からすると門ではなくただの壁だ。

そして、その高さから越えることが出来ないことから見張りや監視カメラなどは付いていない。
でも、魔術を使えば・・・

「アリア、よろしく」

「了解です。『身体能力強化魔術・脚力強化』」

体に流れる力を感じそれを足に集中させ、力の調整はアリアに任せ
る。

「よっ」

地面を踏みしめ軽く飛ぶと、私の足はスッと地面から離れる。
そして門の上部の淵に片手をかけ、私は軽々と門を飛び越えた。

ストッ

「ふーっ・・・よし、アリア、頼む」

「了解！」

上手く着地できた私は、十分中に入って周りに人がいない影に移動
すると、アリアに『俺』の姿になって実体化してもらった。
もちろん、制服の姿で。

「アリア、くれぐれも言葉使いに注意して。常に念話で状況を報告いざとなったらシンクロで私が対処するから」

「任せておけ、相棒！（キラーン）」

「どこの爽やか青年だよ・・・」

親指を立てポーズをとる「俺」に、私は心配でならなかった。

昨日の特訓の成果はあまり出ていない・・・

私は宙から鞆を出す（例の「無限収納スペース」と、それを「俺」に渡した。

「いい？くれぐれも言動に気を付けて」

「了解！」

そう言って校舎の方へ走っていく「俺」の背中を見送り心配のあまり深い溜め息をつきつつも、私はこの学校で一番人目に付きにくいと思われる「例の場所」へと人目を気にしつつ向かった。

§

§

・・・私は驚きのあまり呆然と立ち尽くしていた。

先ほどの麦わら帽子の少女が、3メートルもあるあの裏門を軽々と飛び越えていく光景を見てしまったからだ。

「な、何者だ、あの子は!？」

とりあえず、校舎内に入っていた彼女を見つけ出さない!校内の規律が乱れる!!

そう感じた私は、急いで正門へと向かい彼女を探すため、旧魔法政府軍のメンバーである、木内 正宏に連絡を入れた。

t o b e c o n t i n u e d . . .

#14【ミッション01・入学式その2】

#14【ミッション01・入学式その2】

『なんやて！？麦わら帽子の女の子が高さ4メートルもある裏門を飛び越えただつて！！？』

教室へ向かうため廊下を歩いていると、風紀委員の委員長である風守 伊吹から突然念話で連絡が入った。

麦わら帽子の少女・・・あの時の！！

僕は登校中に見かけた少女を思い出し、彼女も麦わら帽子を被っていたことを思い出した。

『分かった。僕も鞆を教室に置いたらその娘、探しに行くわ』

ピツという電子音と共に、伊吹からの電話を切る。

えらいことになってきたで・・・

§

§

‘俺’に化けたアリアと分かれ、私は例の転移魔術を使い、校舎屋上に来ていた。

昨晚、転移魔術の練習を何回もした（そのついでに、アリアに普段の‘俺’の言動をみっちり教え込ませた）甲斐あって、無事に転移魔術を成功させた私は、誰もいない日陰にあるベンチに座り込み、被っている麦わら帽子を脱いだ。

「ふう・・・」

別段、体内魔力を使用したことで疲れが生じたわけではないが、転移魔術が上手くいくかどうか緊張して精神的な疲れを感じたのだ。

魔術を使うことになれないと、今後困るからなあ・・・

そう思いつつ、目を閉じる。

こうすると、空気中のマナを感じることが出来る。

こうしてみると、確かに空気中のマナ密度が濃いつていう話も頷けるなあ。そういえば、彼女達を追っていたという‘使徒’の連中は、

どうして魔術を使えたんだろう。

うーん、空気中のマナを魔術の使用時に体内に取り込む際、フィルターみたいなものをかけて制限してるとか。

いろいろ考えてみるものの、まだ魔術の知識の少ない私には全く分からなかった。

そういえば、私はどうなんだろう？ひょっとして長年この世界にいるから慣れたとか？

あるいはアリアによって、何らかの方法で制限されているとか？あとでアリアに聞いてみるか・・・（彼女は聞いたことしか言ってくれないらしいからね。）

まあこのことは、このミッションが終わってから考えよう。（フィレス達と会うのもその時だし。彼女達のほうがアリアよりか近代の魔術について詳しいだろうから）

どうせ始業式だから早く終わるし、何か困ったことがあればアリアの方から念話が入るだろうし・・・

日陰となっているこの休憩スペースには、早朝の涼しい柔らかな風が流れていて、私に眠りを誘っているようだった。

「・・・寝ちゃおうかな」

昨晚の準備が徹夜だったせいでより疲れが増していたので、幼児化したこの体のこともあってすぐに眠りに落ちてしまった。

§

§

伊吹から連絡を受けた僕は廊下で俊美と合流し、人気のない裏庭を訪れた。

「よし、俊美、学内範囲で、ターゲットリサーチ生体探知、をかけてくれ」
「了解ッス！」

俊美の‘能力’、‘生体探知’を使い、早速その謎の少女の居場所を突き止めることにした。

俊美はそう了承すると目を閉じ、意識を集中させて周りのマナに干渉しつつ、その索敵範囲を広げていった。

「みつ・・・けたよ、マー君！！場所は高等部東館の屋上！どうやら転移魔術を使用したらしく、その痕跡が残っていることからついさっきそこに移動したものだと思います！！」

「屋上？なんでそないな場所に居るねんな」

そもそも、その少女はこの学校に何をしに来たのだろうか・・・

そんな疑問を浮かべつつも、とりあえず彼女に会って話をしないと始まらないので、その屋上に向かうことにした。

もちろん、手っ取り早くが先決だ。

そのため僕自身の‘能力’である、テレポート‘瞬間移動’を使い、美琴の手を握って一気に二人で移動しようとするが、美琴に手で腕を引っ張られ制止された。

「マー君、伊吹さんも連れて行こうよ。もしその少女がマー君がこの前見た白銀の髪の少女と同一人物だったら、何が起こるか分からないよ。伊吹さんがいれば心強いし」

「お、おう」

僕は美琴の提案に賛成すると、伊吹にこの場所に来てもらうように念話を入れた。

§

§

藤ヶ丘高校は中高一貫で私がその藤ヶ丘中学に通っていることもあ

り、いつもは一緒に登校しているけど、諸々の事情がありお姉ちゃん（直人兄）と一緒に登校できなくて落ち込んでいる雪音です。

・・・それにしても驚きました。

まさか祖父が・・・

それは今朝のことでした。

「お兄ちゃん！朝だよ！」

表向き（とくにお爺ちゃん）には奈緒お姉ちゃん（昨日、女の子になったということで「奈緒」に改名（？））したことを聞いたので、のことは秘密にしている。

お姉ちゃんの部屋の扉を開けると、すでに起きていた。
可愛い寝顔を見に来たのに・・・（泣）

「あ、おはよう、雪音」

「！！／／／／　　お、おはよう、お姉ちゃん」

でも、笑顔で朝の挨拶されたからいつか

あまりの可愛い笑顔に抱きつきそうになるのを抑えるの、苦労したけど。

「ごめんね、雪音。一緒に学校行けなくて」
「いいのいいの！仕方ないよ！」

お姉ちゃん、私を心配してくれている・・・
でも今一番大変なのはお姉ちゃんだから、私が心配かけたらいけない！

その後、朝食はどうしようかという話になってとりあえず私がこっそりこの部屋に飲み物とトーストを持ってくることになった。

そろそろと階段を下り食堂を見ると、珍しく祖父はすでに食べ終え居間で一服していた。

「雪音、直人は起きたか？」

朝早く起きた私によつてすでに用意されたテーブルに置いてある朝食のトーストの乗ったお皿をそつとつかんだ私は、祖父にいきなり声をかけられビクツとなつてしまい、つい片言で返答してしまった。

「マ、マダデス」
「そうか・・・」

危ない危ない。

振り向かなくてもしたら、怪しい行動がバレるじゃないですか。

とりあえず、この危険地帯から早く脱するため、急いで移動した。

家を出るところは祖父に見せなければならぬというお姉ちゃんの話から、玄関までアリアさんが変身して家を出るところを見せ

「行って参ります、お爺様」

「おう、気を付けて行くのじゃぞ」

ズガガガガガ

な、なに今のお嬢様の言い方！？
しかもそれをスルーする祖父！！
歳・・・なのかな・・・？

「い、今のは危なかった・・・」

おそらく今のやりとりを聞いていないであろうお姉ちゃんに、後で報告しなければ・・・

アリアさん・・・そこはふざける所じゃないですよ・・・

「あ、雪音。少し話があるんじゃないか？」
「はい、何ですか？」

アリアさんが家を出た瞬間を見計らったかのようなタイミングで、祖父は私を呼び止めた。

「直人のことなのじゃが・・・」
「え？」

「『魔術』のことは……直人から聞いたのかね」

……はい？今、ナント仰リマシタカ？

「な……何のことかな？」

「そうか。まあ、^{ワシ}儂が『そのこと』を知っていることを、直人にはまだ教えんでくれんかの」

「ええつと……お爺ちゃんは何で『そのこと』を知っているの？」

「それは儂が昔、魔法世界に住んどって、儂自身が魔術師だからじゃ」

……驚愕の真実が発覚。

『魔術』のことを『知っていた』だけでなく、魔術師だったの！！？

驚いて固まっていた私だが、ふと疑問に思った。

「でも私が魔術を使う事ができることに気付いたアリアさんは、お爺ちゃんのこと、何も言つてなかったよ」

「それは、常に体内魔力を完全に遮断していたからじゃ」

なる程。それで魔力の痕跡とかがなかったってことだね。

アリアさんの話では、魔術師は常に微量ながらも体内魔力を放出しているらしい。

それを遮断すれば、魔術師だと気付かないというわけだ。

さらに祖父は続けた。

「それに、四朗さん（私達の父）は魔術師ではないが、由希子（私達の母）は魔術師じゃぞ」

なるほど・・・何故私達に魔術の資質があるのかはこれではつきりした。

親が魔術師ならば、子も魔術師ってことか。

「・・・じゃが、直人だけはちと‘特殊’での。妹である雪音だけには知っておいてもらいたいのじゃ」

「？」

・・・そしてまた固まる私。

こんなの、お姉ちゃんに教えられる話じゃないよ・・・

「時期が来れば、儂から直接直人に話すから安心しなさい」

「は、はい・・・」

その話は、一週間後・・・お姉ちゃんが‘元’の姿に戻る日だった
りする。

§

§

朝日が部屋の窓から射し込み、その眩しさを私は目覚めた。

「あれ・・・いつの間に寝ちゃったんだろう」

沢山の本が散乱する机の上の中から時計を見つけ、見てみると朝の8時を過ぎていた。

奈緒（直人のこと）が学校を終えて帰ってくるまでの間‘使徒’の対策について考えることにし、昨晚から徹夜であることについて調べていた私達は、いつの間にか机の上につ伏して眠ってしまった。

この世界での魔術の行使についてだ。

ローウェント家から歴史書や魔術についての本をこのアパートに持ってきてはいるが、何故彼等がこの世界で魔術を使うことができたかについてはさっぱり分からなかった。

「はあ・・・結局分からなかったなあ・・・」

まだ机の上で寝ているリーザを見、彼女も頑張ってくれたんだなと思いつつも、この対策をとらなければ先に進めないことから思わず盛大な溜め息を吐いた。

「おっと、いけない。気持ちを切り替えた方がいいな」

そう自分に言い聞かせた私は彼女に毛布を掛けてやり、いつもは彼女が作ってくれる朝食を今日は私が作ることにした。

最近つらく当たっていたことへのお詫びと感謝の気持ちを込めてのことである。

昨日のことであって疲れているであろう彼女を起こさないように注意しながら、私は朝食の準備を始めた。

§

§

一面に広がる青々と生い茂る草原。澄んだ青空。

風景は違うが、私はこの世界にあの時と同じものを感じていた。

「また来てくれたのね。うれしいわ」

そう言ったのは、真っ暗な世界で会ったあの少女だった。その声は今の私と同じ、澄んだ柔らかな声。

「もしかしてここは・・・私の精神世界？」

「そうよ。元々はこんな綺麗な場所だったの。あの時はアナタが危険な状態にあったから、あんな真つ暗な世界だったのよ」

・・・なるほど。

それじゃあ、彼女は‘もう一人の自分’ということ？

「うん・・・半分正解で半分不正解ね」

「どういうこと？」

「今はまだその答えをアナタに教えることはできないの。これは自分自身で見つけ出さなければならぬ‘答え’だからね」

曖昧な答えを返された私は少しうなだれたが、「きっとアナタなら、その‘答え’を導き出せるわ」という彼女の励ましの言葉で少し元気がでた。

「あ、あとアリアがいない間、何かと不便だろうから身体強化魔術の知識とその感覚的な解釈をアナタに‘返す’わ」

え？今、‘返す’って言った？

それって・・・

「じゃあ、またね」

「えっ、ちよつと待つ・・・」

またもや突然辺りが光り出し、私は現実へと引き戻されていくのだ
った。

§

§

「えっ・・・」

目を覚ますと、目の前に意外な人物がいた。

「私はこの高校の風紀を任されている、風守 伊吹だ。キミは何者
だ？」

さすがに外見が小さい女の子だけあってその腰に差している木刀を突きつけたりはしないんですね、伊吹さん。

でも普通の女の子ならそんな殺気を当てたら泣いてしまいますよ。

私も別の意味で泣きそうになったが。

私の周囲には伊吹さんの他に、私の親友の正宏、同じクラスの篠崎俊美さんがいた。

・・・この状況、どうよ？

t o b e c o n t i n u e d . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1137m/>

トラブルメーカーな天使

2011年3月2日17時41分発行